特ニ日本銀行ヘ支給セラルヽ樣御詮議相成度。

兌換銀行券ノ發行ハ日本銀行條例第十四條ニ「日本銀行ハ兌換銀行券ヲ發行スルノ權ヲ有ス」トアル規定ニ據リ日本銀行ニ附與セラレタル特權ナリ。此特權ノ行使ニヨリ自ラ發行シタル兌換銀行券ノ引換ヲ爲スコトハ兌換銀行券條例第六條ニ「兌換銀行券ノ引換ヲ請フモノアルトキハ日本銀行本店及支店ニ於テ營業時間中何時ニテモ兌換スベシ」トアリテ固ヨリ日本銀行ノ義務ニ屬スルモノナリ。故ニ兌換銀行券ノ引換ハ日本銀行固有ノ事務ニシテ政府ノ事務ニ非ズ、政府ノ事務ニアラザルモノニ對シテ事務執行ニ要スル費用ヲ政府ヨリ支出スルノ理由ナシ。

右ハ本年三月以降臺灣金庫設置ノ件ニ付當省ト日本銀行トノ間ニ於テ往答セシ概況ニシテ、今日ニ至ルモ尙ホ之ヲ設置スルノ運ニ至ラズ。

而シテ目下ノ臺灣ニ於ケル國庫金ノ取扱ヲ見ルニ、國庫金ノ保管出納ハ擧テ出納官吏ニ一任セリ。元來出納官吏ナルモノノ組織ハ國庫ヨリ現金ノ前渡ヲ受ケテ小口ノ仕拂ヲ爲スト、小口ノ收入金ヲ納入ヨリ領收シ之ヲ國庫ヘ納入スルトニアリ。然ルニ臺灣ハ金庫ノ設置ニ至ラザルガ爲メニ目下ハ國庫金保管出納ノ全部ヲ擧テ出納官吏ニ委托取扱ハシムルノ實況ナリ。萬一國庫金保管出納上ニ違法ノコトヲ生ゼンカ、實ニ大藏大臣ノ責任上辨通ノ途ナキモノニシテ、最早金庫設置ノ義ハ一日モ猶豫スベカラザルモノナリ。

故ニ大藏大臣ハ法律命令ノ命ズル處ニ據リ斷然日本銀行ヘ命令ヲ下ダシ金庫ヲ設置セシメ事務可然取扱ト存候。

以下四葉日本銀行ヨリ提出セシ覺書

一、本金庫ハ臺灣守備兵ヲ以テ護衞相成度且支金庫ハ自衞ノ途相立候迄テ守備兵ヲ以テ同樣護衞相成度。

一、金庫保管ノ現金及遞送中ニ係ル現金ニシテ金庫員ノ不注意ヨリ生ジタル損失ヲ除クノ外不可抗力ノ損害ヲ受ケタルトキハ國庫ニ於テ補塡相成度。

一、各廳經費ノ送金ニシテ其爲替ノ取組ミ得ラルヽ地方ハ金庫ニ於テ爲替取組ノ上其爲替券ヲ各廳ヘ交付シ各廳ヨリ受取人ヘ直接送付相成度。

又現金遞送ノ場合ハ臺灣守備兵ヲ以テ護衞相成度。

一、金庫ニ供スベキ家屋倉庫ヲ新築スル迄デ總督府ヨリ相應ノ家屋貸與相成度但本金庫建築ハ凡ソ三ケ年以內ニ建築ノ見込ニ有之候。

一、本支金庫ヲ創立シ事務實施期日ハ更ニ日本銀行總裁ヨリ具申ノ上ニ告示相成度但先以テ臺北本金庫ヲ開設シ漸次臺南、臺中、基隆、澎湖島ノ四支金庫開設致シ度。

一、臺北本金庫及四支金庫取扱手數料ハ當分ノ間一ケ年金七萬二千圓（二十九年度臺灣全島歲入金六百萬圓歲出金千八百萬圓合計金二

千四百萬圓ト見積リ此金額ノ凡ソ千分ノ三ニ相當ス）交付相成度但金庫間現金遞送費及各廳經費送金料等ハ實費ニテ交付相成度。

右本支金庫ノ外ニ尙ホ支金庫若クハ出張所ヲ設置スルヲ必要トセラルヽトキハ前項手數料ノ外實費御交付相成度。

一、前項手數料ハ金庫ニ於ケル經常ノ費用ニシテ更ニ削減シ得ベカラザル金額ナレバ實際歳入出額ニ增減アルモ此金額ヲ以テ向フ十ケ年間ノ請負料ト定メ交付相成度。

一、臺灣ニ流通ノ兌換銀劵ヲ交換ノ爲メ同地ニ交換所ヲ設立シ該基金トシテ豫テ一圓銀貨（凡ソ壹千萬圓程ノ見積リ）ノ回送ヲ要ス。右ハ目下總督府ニ於テ回送ノ振合ニ依リ該運搬費ハ實費ヲ以テ特ニ日本銀行ヘ支給セラルヽ樣御詮議相成度。

臺灣金庫經費調書

一金七萬四千四百參拾六圓八拾錢也

內譯

臺北本金庫及四支金庫經費

金四萬五千六百六拾八圓　俸給及加俸

但本支金庫主任以下書記六十四名ニシテ總テ四割ヲ加俸ス

金一萬二千九百三十六圓　雜給

但守衞小使各二十二名ノ俸給ニシテ共ニ四割ヲ加俸ス

金五千圓　旅費

但役員赴任旅費

金三百八十四圓　筆紙墨類

但一人年額金六圓ノ割

金千百圓　帳簿計表其他印刷費

金百四十六圓　郵便稅

但各金庫每日書留郵便一通ノ割

金千八百七十二圓　電信料

但各金庫五十ノ日ニ於テ一回（五音信ト定メ）ノ割

金二千八百九十圓八十錢　宿直員辨當料

金千二百圓　薪炭油費

金三千二百四十圓　雜費

但一人平均年額參十圓ノ割

豫算（大阪金庫費ニ依ルモノ）

臺北本金庫經費

一金五千八百八十圓　事務員十四人俸給

但事務員ヲ十四人トセシハ大阪本金庫ヲ標準トセリ事務員一人ニ付平均金四百二十圓大阪本金庫ノ事務員一人平均二百八十圓（二十三年度豫算）ニ五割ヲ增シタル高ニ同シ（目下臺灣在勤文官ハ三割ノ增俸ナルモ本案ハ其以前ノ豫算ナルニ因ル）

一金千八百圓　現金取扱人五人俸給

但現金取扱人ヲ五人トセシハ大阪本金庫ノ十人ヲ標準トシ大阪ノ如ク現金ノ受授多カラズト見込タルニ因ル現金取扱人一人ニ付平均三百六十圓大阪本金庫ノ現金取扱人一人平均二百四十圓ニ五割ヲ增シタル高ニ同シ。

一金五百四十圓　小使三人給料

但小使一人ニ付平均金百八十圓ヅヽ又大阪本金庫ニハ小使ノ豫算ナキモ實際必要ナリト認メタルニ因ル。

一金九十六圓七錢五厘　帳簿製造費

但各地本金庫ノ帳簿製造費一ケ所ニ付平均金六十四圓五錢ニ五割ヲ增シタル高ニ同ジ（二十三年度豫算參照）

一金四十二圓　郵便稅

但中央金庫ヘ三百回一回ニ付金四錢ヅヽ四支金庫千二百回一回ニ付金二錢ヅヽ內地各本金庫郵便稅豫算ニ同シ。尤モ實際ハ回數ニ減シ重量ニ於テ增スベキモ總計ニ於テ增減ナカルベシ。

一金二百十七圓六十二錢　電信料

但中央金庫ヘ一ケ年七十八回一回ニ付三音信金二圓七十九錢ヅヽ卽チ二週間ニ三回ノ發信ヲナスモノト豫定ス（三音信二圓七十九錢トセシハ大藏省ニ於テ實際仕拂ヒタル例ニ因ル）

一金千三百十七圓四十錢　旅費

但本支金庫員三十五人中七人交替スルモノトシテ東京臺北間十四回往復金九百八十一圓九十六錢支金庫員十六人中四人本支金庫間ニ交替スルモノトシテ八回往復金百十五圓二十錢支金庫巡視旅費トシテ金二百二十圓二十四錢ト豫定ス（內地旅費額ハ一般判任官ニ臺灣內地ノ旅費額ハ臺灣總督府判任官ニ同ジ）

一金二百四十圓　家賃

但臺灣誌ニ商店ノ家賃一ヶ年凡金八十圓トアルニ三倍セリ。

一金九十五圓　備品費

但金庫員一人ニ付金五圓ノ割内地各省豫算ノ備品費ニ凡ソ二割ヲ加ヘタル高ニ同ジ。

一金二百三十七圓五十錢　筆墨紙

但金庫員一人ニ付金十二圓五十錢ノ割内地各省豫算ノ例ニ依リ凡ソ二割ヲ加ヘタル高ニ同ジ。

一金二百五十六圓五十錢　消耗品

但金庫員一人ニ付金十三圓五十錢ノ割内地各省豫算ノ例ニ依リ凡ソ二割ヲ加ヘタル高ニ同ジ。

一金二千百圓　巡査五人雇入費

但巡査一人ニ付金四百二十圓大阪本金庫一人ニ付金百八十圓トアルニ臺灣ニ於ケル巡査手當一人ニ付金百八十圓(最高額)ト俸給被服其他ノ費用割増トシテ金六十圓トヲ加ヘタル高。

合計金壹萬二千八百二十二圓九錢五厘

但大阪本金庫二十七年度經費決算高(俸給其他諸費金九千〇八十一圓六十七錢二厘現金取扱人俸給金三千三百二十五圓二十錢)ニ比シ俸給其他ノ諸費ニ於テ金千九百四十圓ヲ増加シ現金取扱人俸給(大阪ハ十人臺北ハ五人)ニ於テ金千五百二十五圓二十錢ヲ減ズルモ大阪ハ關西各本金庫トノ交渉頻繁ナルモ臺北ハ同島内ノ支金庫トノ交渉ニ止マルニ依ル。

臺灣四支金庫經費

一金四千八百圓　事務員十六人俸給

但事務員一人ニ付平均參百圓支金庫毎ニ四人ヅヽ。

一金千四百四十圓　小使八人給料

但小使一人ニ付平均百八十圓。

一金百二十七圓二十錢　帳簿製造費

但一支金庫ニ付金三十一圓八十錢内地支金庫帳簿製造費金二十一圓三十一錢ニ五割ヲ増シタル高ニ同ジ。

一金十二圓　郵便税

但一支金庫ニ付本金庫ヘ一ヶ年百五十回一回ニ付金二錢。

一金五百二十圓　家賃

但一支金庫ニ付一ヶ年金百三十圓

備品費

一金八十圓　但事務員一人ニ付金五圓ノ割

筆墨紙

一金二百圓　但一人ニ付金十二圓五十錢ノ割

消耗品

一金二百十六圓　但一人ニ付金十三圓五十錢ノ割

巡査十四人雇入費

一金五千八百八十圓　但一人ニ付金四百二十圓ヅヽ支金庫事務ノ繁閑ニ依リ雇入巡査一支金庫ニ付四人ト三人トニ區別セリ。

合計金壹萬三千二百七十五圓二十錢

總計金二萬六千九十七圓二十九錢五厘

豫算（臺灣總督府費ニ依リシモノ）

臺灣金庫經費調

事務長及事務員俸給

一金六千二百九十八圓五十錢

內

事務長俸給

金九百七十五圓　但本俸年額千圓加俸三百圓合計千三百圓ノ九ヶ月分

事務員俸給

金五千三百二十五圓五十錢　但一人平均年額四百二十圓加俸百二十六圓合計五百四十六圓十三人ニ係ル年計七千九十八圓ノ九ヶ月分

現金取扱人給料

一金千七百五十五圓　但一人平均本俸年額三百六十圓加俸百八圓合計四百六十八圓五人ニ係ル年額二千三百四十圓ノ九ヶ月分

小使給料

一金四百五圓　但一人月額十五圓三人ニ係ル九ヶ月分

小使食料

一金二百十六圓　但一人月額八圓三人ニ係ル九ヶ月分

帳簿製造費

一金九十六圓七錢五厘　但本金庫ノ帳簿製造費一ヶ所平均六十四圓五錢ノ五割增

郵便料

一金四十九圓八十錢

但中央金庫ヘ一ヶ年三百回發信スルモノトシ此九ヶ月分凡二百二十五回一回四錢ヅヽ四支金庫二ヶ年千二百回發信スルモノトシ此九ヶ月分九百回一回二錢ヅヽノ割外創設ノ際ナルヲ以テ二十二圓八十錢ヲ見込。

電信料

一金百六十七圓四十錢

但中央金庫ヘ一ヶ年七十八回トシ九ヶ月分凡六十回一回音信金二圓七十九錢ノ割。

旅費

一金二千四百四十圓五十二錢

內

交代旅費

金千八百七十五圓七十二錢

但本支金庫員三十五人ノ內七人交代スルモノトシテ東京臺北間一人百三十三圓九十八錢此回數十四回分。

本支金庫間交代旅費

金三百六十四圓八十錢

但本支金庫間八回分一回本支金庫間距離二十八里往復五十六里此車馬賃（內國定額一里十錢ノ外割增二十錢合セテ三十錢ノ二倍ヲ以テス）金三十三圓六十錢日當六日分（一日金二圓）金十二圓合計金四十五圓六十錢ノ割。

支金庫巡視旅費

金二百圓

但一人二百里ヅヽ巡回スルモノト豫定シ二人分車馬賃（一里三十錢）金百二十圓日當四十日分八十圓合計本行ノ如シ。

家賃

一金百八十圓

但一ヶ月二十圓ノ九ヶ月分。

備品費

一金七十一圓二十五錢

但本金庫員一人一ヶ年平均五圓ノ割十九人ニ係ル九ヶ月分。

筆墨紙

一金百七十八圓十三錢

但同上一人一ヶ年平均十二圓五十錢前同斷。

消耗品

一金百九十二圓三十八錢

但同上一人一ヶ年平均十三圓五十錢前同斷。

巡査傭入費

一金千五百七十五圓

但一人年額四百二十圓五人ニ係ル九ヶ月分。

運搬及雜費

一金二百二十圓

計金壹萬三千八百四十五圓五錢五厘

支金庫（四ヶ所分）

一金五千五百四十八圓　事務員俸給
但四人ハ平均一人年額本俸四百二十圓加俸百二十六圓トシ合計二千百八十四圓十二人ハ一人平均年額本俸三百圓加俸九十圓トシ合計四千六百八十圓此總六千八百六十四圓ノ九ヶ月分。

一金千八十圓　小使給料
但一人一ヶ月十五圓ヅヽ八人ニ係ル九ヶ月分。

一金五百七十六圓　小使食料
但一人一ヶ月八圓ヅヽ八人ニ係ル九ヶ月分。

一金百二十七圓二十錢　帳簿製造費
但各地支金庫平均二十一圓三十一錢ノ五割ヲ增一ヶ所金三十一圓八十錢トシ四ヶ所ニ係ル分。

一金九圓四錢　郵便料
但一ヶ年ヘ支金庫ニ付本金庫ヘ百五十回發信スルモノトシ此九ヶ月分凡百十三回一回二錢ヅヽノ割一支金庫二圓二十六錢トシ四ヶ所ニ係ル分。

一金六十圓　備品費
但金庫員一人ニ付一ヶ年平均五圓ノ割十六人ニ係ル九ヶ月分。

一金百五十圓　筆墨紙
但同上ニ付一ヶ年十二圓五十錢ノ割前同斷。

一金百六十二圓　消耗品
但金庫員一人ニ付平均十三圓五十錢ノ割十六人ニ係ル九ヶ月分。

一金三百九十圓　家賃
但一ヶ年百三十圓ノ割四ヶ所ニ係ル九ヶ月分。

一金四千四百十圓　巡査傭入費
但一人一ヶ年四百二十圓ノ割十四人ニ係ル九ヶ月分。

一金百四十圓　運搬及雜費
但一ヶ所三十五圓ヅヽ四ヶ所分。

計金壹萬二千二百五十二圓二十四錢
合計貳萬六千九十七圓二十九錢五厘

外　金庫員三十五人ノ赴任旅費

金四千六百八十九圓三十錢

但一人ニ付百三十三圓九十八錢（判任旅費額ニ依リ汽船車賃車馬賃ハ二倍セリ）。

此外臺北ヨリ支金庫ニ赴任スル十六人分ノ旅費ヲ要ス。

遼東及臺灣統治ニ關スル答議

ミシエル、ルボン

閣下ヨリ余ニ諮詢セラレタル問題ハ頗ル複雜セルモノタルヤ明ナリ。抑モ今般日本帝國ニ附屬シタル新領地ニ嚴密ニ適用スベキ司法行政事務ヲ畫策セントスルニハ、一方ニ於テハ政府ノ意向ニ於テ新領地ノ將來竝ニ其一般ノ組織ヲ指示セザルベカラザル大體ノ方針、竝ニ已ムヲ得ズ特別司法制度上ニ影響ヲ及ボサヾルベカラザル概括ノ意見ヲ知悉スルコトヲ必要ナリトシ他ノ一方ニ於テハ新領地ニ住居スル所ノ人民ノ現今ノ風俗ヲ知ラザルベカラズ。蓋シ其風俗ニ就テ豫ジメ日本ノ法律ヲ以テ比較ヲ爲スハ如何ナル手段ヲ以テ新領地ニ日本ノ制度ヲ移植シ得ルヤ否ヲ鑒識スルニ付テ必要ナルコト明白ナル事實ナレバナリ。此等ノ政治上ノ方針及司法上ノ參考ヲ缺クニ於テハ、實價ナキ幽遠的ノ意見書ノ外作成スルコト能ハザルベシ。然レドモ閣下ガ余ニ諮詢セラレタルモノハ斯ノ如キモノニ非ラザルコト明矣。是ヲ以テ余ハ今般ノ平和條約ニ依リ、日本帝國ガ得タル眞ニ未曾有ニシテ且歡喜スヘキ位置ニ就テ余ガ心ニ感得シタル主要ノ思察ヲ全ク概略ニ且假定ノ方法ニ依リ簡單ニ表明シ以テ閣下ノ希望ニ副ハントス。

先ヅ余ハ日本ガ島國（エンシユレール）トシテ強國ニシテ之ヲ環繞スル所ノ島嶼ノ方位ニハ最モ容易ニ其版圖ヲ擴ムルノ傾向ヲ有スレドモ、大陸トシテ強國ト爲ルニハ日本ノ安寧、財政竝ニ恐クハ其生存スラモ危フスルニ非ズンバ之ヲ試ミルコトヲ得ザルベシトノ觀察ヲ下サントス。是レ余ガ一個人トシテノ說ナレドモ、亦斯ノ如ク觀察セザルノ已ムヲ得ザル所以ノモノハ、蓋シ史ニ徵シテ其事實ノ正鵠ナルベキヲ信ズレバナリ。而シテ特ニ歐洲ニ於ケル英國ノ勝敗史、一國民ガ其國ノ天然ノ位置ニ依リ、世界ノ平均力ヲ以テ有シ得ル所ノ合理的ノ限界、竝ニ公道ヲ遵守セザレバ、國ノ一致ト勢力ヲ害スル所ノ制裁ニ服スベキ適正ナル疆域トヲ按ズレバ益々其然ルベキヲ疑ハザルナリ。此原則ニ從ヒ余ハ日本ノ新所得ヲ以テ大陸ニ於テ享クル所ノモノト、島嶼ニ於テ受クル所ノモノトノ二ニ區別スベシ。

（第一）　遼東半島ハ余ガ今論ジ來リシ所ノ意ニ據リ日本固有ノ土地ノ如クニ組織セズシテ、單ニ藩屬地ノ如クニ組織セザルベカラズ。而シテ又從來本國ヨリ別離シタル植民地ノ如クシテ組織セザルベカラズト思惟ス。次ニ該半島ニ行政上就中司法上ノ大ナル自治ヲ許與シ之ト同時ニ之ヲ甚ダ強大ナル兵權ニ服從セシムルヲ可ナリト信ズ。

此ノ施政ノ法タルヤ、卑見ニ依レバ日本ガ該半島ヲ領有スル期間ト、或ハ之ヲ拋棄スル時トヲ問ハズ莫大ナル利益ヲ來タスベシ。

然ラバ先ヅ領有中ハ此ノ寬假及强硬兼併ノ政略ニ依リテ、此領土ハ最モ容易ニ平安ナルヲ得ベク、而シテ斯ノ如ク堅硬ト溫柔トヲ調和シタル權力ノ下ニ在ル人民ヲ最モ容易ニ制御スルコトヲ得、抑モ戰勝國ハ其占領地ニ對シテ本國ノ法律ニシテ而モ善良ナル法律ヲ施行セズ、却テ其占領地固有ノ自由、習俗、慣例ヲ維持保存シ、以テ人心ヲ收攬スルヲ得ベシ。是レ往古羅馬ノ元老院ガ執リシトコロノ隨一ノ政略ニシテ、該國ハ外交政略ヲ行フニ方リ、非常ノ節制ヲ用ヒ、藩屬地ノ民望ヲ收攬スルコトヲ孜々トシテ勉メタリ。此方法ニ依リ羅馬帝國ノ羈軛ハ輕微ノ觀ヲ呈シ、而シテ叛亂ノ起ルアルモ羅馬ノ軍隊ハ常ニ容易ニ之ヲ鎭定セリ。故ニ今兩大競爭國卽チ羅馬及カルターヂユノ治蹟ヲ彼此比較スルニ、カルターヂユハ英俊ノ將士及巨萬ノ財力ヲ有シタリト雖モ、決シテ其屬地ヲ統御スルコト能ハザリキ、何トナレバ該國ノ屬地大ニ過ギタル代リニハ、之ニ處スルノ道其宜キヲ失シタレバナリ。然ルニ羅馬ハ此點ニ付テノ政略ハマキアウエル氏竝他ノ史家等ガ適切ニ歎美セシ如ク、征服シタル國每ニ多クハ變換セラレ、而シテ羅馬ノ法律ヲ强行スルコトナク、後チ竟ニ孰レモ之ガ施行ヲ希望セシムルコトヲ得タリ。果シテ遼東半島ノ人民ニシテ余ガ今論述スルガ如キモノナラシメバ、該人民ノ服從ハ今日迄殊ニ地方的大獨立ニ淵源セズンバアラズ。然レドモ渠等ハ時宜ニ依リテハ中央政權ニ對シテ殆ンド犯シ難キ習慣カラ對抗セシムルコトアルベシト想像ス。是ヲ以テ日本政府ハ今日迄支那政府ガ行フタル權力ニ超越シタル主働的權力ヲ該人民ニ對シテ行フコトヲ試ミルベカラズト論決スベシ。此條件ニ代リ該半島ニ日本ノ諸法律就中民法ヲ施行セント欲スルハ其

必要ナキノミナラズ、或ハ危險ノ業ナルベシ。要スルニ該半島ノ地方首長ニ對シテ善良ナル行政上ノ監督ヲ行ヒ、而シテ恩惠的制度竝ニ敗俗及專横ノ讎敵ニシテ、人及所有權安全ノ保護者タル自由制度ノ利益ニ漸ヲ以テ霑ハシムレバ以テ足レリトス。

其他又該人民ヲシテ帝國本土ノ人民ト近似セシムルコト其度ヲ過グレバ、論理上渠等ニ廣濶ナル公權ヲ賦與セザルヲ得ザルニ至ルベシ。是豈他日日本ノ爲メニ患害ヲ惹起スルモノニ非ザルナキヲ得ンヤ。又遼東半島ニ對シテ日本ノ憲法ヲ施行スルハ、是レ滿洲人ヲシテ日本ニ進入シ、本土内ニ住居シ、舊慣及得意ノ勞働ヲ携ヘ來ルコトヲ許スニ外ナラズ。果シテ該法ヲ施行スルニ於テハ無數ノ支那人ハ日本ニ進入シテ漸次充溢シ、遂ニ大ニ經濟界ノ全體ヲ攪亂スルニ至ルベシ。然レドモ余ハ此點ニ付テハ深ク論ゼザル可シ。何トナレバ此點ハ重モニ他ノ邦國ノ例ニ屬シ且日本政府ハ業既ニ此點ニ思慮ヲ凝シタルベキコトヲ疑ハザレバナリ。

惟フニ戰爭及平和條約ノ良結果ニ依リ、日本人ハ支那内地ニ入リ、工作物ヲ撒布シ從來久シク歐洲人就中英國人ガ占メタル貿易ノ利ヲ獲得スベキヤ言ヲ俟タズ。但ダ遼東半島ヲ以テ日本ノ一縣ト爲シ、又ハ半島ノ人民ヲシテ帝國本土ノ臣民ニ近似セシムレバ直接ノ反動ヲ幇助シ以テ日本ノ不幸ヲ釀成スルノ恐レアリトス。

日本政府ハ該半島ニ於テ完全ナル行政及司法ノ二制度ヲ設クルコトヲ試ミツヽアルベシ。此制度ニシテ一タビ議定セラルヽニ於テハ、多數ノ官吏新ニ任命セラルベキガ故ニ、今日迄冷遇セラレタル敏腕家ノ多數ヲシテ青雲ニ登ルノ機會ヲ得セシムルヤ疑ヲ容レズ。而シテ政黨中ノ重モナル反對者ヲ官吏ト爲シテ該地ニ派遣セバ、政府ハ障害物ノ多數ヲ免カレ、隨テ邦國ハ開明ノ進路ニ向テ自在ニ其歩ヲ進ムルコトヲ得ルヤ亦明カナリ。夫レ然リ故ニ余ガ前ニ揭記シタル自治制度ヲ施行スルニ於テハ、却テ高給ノ高等官吏ノ少數ヲ配置シテ以テ足レリ。然ルニ今最新ノ政治ヲ以テ渠レノ舊慣ヲ打破シ、官吏ノ多數ヲシテ舊來ノ首長ニ交代セシメバ、或ハ一言以テ之ヲ竭セバ急劇ノ變化ヲ行フハ是レ叛亂ヲ豫防スルニ非ズシテ却テ之ヲ挑發スルノ手段ニアラザル乎。或ハ内部ノ政治如何ニ整美ナリト雖モ、外政ノ紛擾ヲ惹起スル所ノ反亂ヲ釀成スルモノニアラザル乎、是レ極端ニ走ルガ如キ問題ナリト雖モ、亦余ガ論ジテ玆ニ到ラザルヲ得ザル所以ナリ。

今ヤ植民地ガ本國ヨリ別離シタル時ノ場合ヲ豫想セントス。

第一　後日ニ至テ日本ハ最モ利益ヲ有スル所ノ土地ト交換センガ爲メ等ノ事情ニ依リ、遼東半島ヲ抛棄センコトヲ希望スルコトアルベシ。此場合ニ於テ日本ハ該半島ヲ以テ一縣ト爲サズシテ却テ一ノ單純ナル植民地ト爲シタリシノ利益ヲ曉ルベシ。何トナレバ一縣ヨリモ一植民地ヲ讓與スルコト頗ル容易ナレバナリ。按ズルニ佛國ハ政略ニ依リ其殖民地ノ多數ヲ讓與セリト雖モ、決シテ一州ヲ讓與シタルコトナク、唯々腕力ノ爲メ已ムヲ得ズ之ヲ割與シタルニ過ギズ。況ンヤ君主ト雖モ

一縣ヲ抛棄スベキコトヲ命ズルヲ得ザルノミナラズ、臣民一人トシテ其同胞ト分離スルコトヲ肯シ能ハザレバナリ。是レ蓋シ道德上ノ困難ナレバナリ。故ニ遼東半島ニシテ一縣ト爲サヾルニ於テハ、此位置ハ土地交換ヲ有益ナリト認ムル所ノ政治家ノ爲メニ他日大ナル妨害ヲ來タスベシ。

第二　清國ハ他日該半島ヲ腕力ヲ以テ回復セント試ミルコトアルベシ。果シテ然ラバ分外ニ統治セラレタル殖民地ハ他ノ植民地ヨリモ最モ容易ニ叛亂ヲ起シ、而シテ最モ大ナル獨立ヲ渠ニ許シタル敵國ニ容易ニ與ミスベキコト古來ノ經驗ニ徵シテ明白ナル事實ナリ。彼ノ蠻民ガ羅馬帝國ヲ襲ヒシ時ニ方リ、羅馬ノ屬國ハ之ト干戈ヲ交ヘズシテ却テ之ヲ援ケタリ。何トナレバ羅馬東帝國ハ中央專治ニ過ギタル政略ヲ以テ此屬國ヲ連結シタレバナリ。近世ニ至リ歐洲ノ國民ハ米國ニ於ケル殖民地ノ免脫運動ヲ弱ムルニ付テハ、本國ニ連結スル所ノ鎖繩ヲ速ニ弛メテ以テ其目的ヲ達シタリキ。元來清國人ハ世界ニ於テ外國ノ勢力ニ對シ最モ反抗スル者ナレバ、之ニ其舊慣ヲ維持セシムレバ渠等ハ平穩ニ服從スベシト雖モ、若シ其壓嫌スル所ノ法律ヲ施行セバ、渠等ハ不平ヲ唱ヘ再ビ清國ノ領土ニ復センコトヲ希望スルニ至ルベシ。果シテ斯ノ如クンバ渠等ノ陰謀ハ清國ノ干涉ヲ喚起シ、更ニ玆ニ戰端ヲ開クニ至ラン。而シテ清國若シ今回ハ其莫大ナル軍人ト金力トニ加フルニ頗ル整頓セル組織ヲ以テセバ或ハ恐ル此戰爭ハ前回ノ如ク能ク其功ヲ奏セザランコトヲ。

第三　殖民地ノ分離ハ日本ノ意思ニ依ルモ將タ清國ノ勝利ニ依ルモ起來スルコトナキヲ得レドモ殖民地自カラノ免脫ニ依リテ生ズルコトアルベシ。然レドモ是レ遙カニ將來ノ事ニ屬スルモノタルハ世界ノ各殖民地ニ付テ其然ルベキヲ證シ得ベシ。佛國著名ノ宰臣「チユルキゴー」氏曰、殖民地ハ恰モ樹木ニ結着スル所ノ果物ノ如シ。其成熟スルニ至ラザレバ地ニ落チズ」ト、明言ナリト謂フベシ。然ラバ上來余ガ論ズル所ニ據レバ、殖民地ニ於ケル行政ニシテ中央專治ニ過グレバ免脫ノ避クベカラザル時機到來センコト遠キニ非ラザルベキヲ信ズ。

前記ノ理由ニ依リ遼東半島ヲシテ屬國ト爲スト同時ニ、帝國ヨリ之ヲ區別スルヲ以テ得策トス。一言以テ之ヲ蔽ヘバ之ヲ一縣ト爲サズシテ一殖民地ト爲シ、而モ及ブダケ自治的殖民地ト爲スニ若カザルヲ信ズ。抑モ余ハ中央專治ノ如キ不條理ナル制度ニ絶對的反對スル者ナリ。蓋シ此制度ハ從來常ニ佛國ニ行ハレタルモノニシテ、而シテ之ガ爲メ十八世紀以降殖民地ノ點ニ付テ、佛國ガ英國ヨリモ劣等ノ地位ニ立ツ所以ナリ。余ハ又此制度ハ經驗ニ徵シテ斷乎トシテ批難スベキモノト信ズ。何トナレバ佛國ノ殖民地ガ常ニ其治蹟ヲ揚ゲザルハ、其理由佛國人ガ殖民政略ニ拙劣ナルガ故ニアラズ。要スルニ該國民ハ概シテ英國人ノ如クニ遼遠ノ地ニ驥足ヲ伸バスノ嗜好又ハ需求ヲ有スルニアラザレドモ、今日世界中到ル處大殖民地ヲ有スルヲ以テ、國光ヲ宣揚スル所以ノモノ多クハ地理學上ノ大發見ニ其基ヲ啓キタルニ依ラズンバアラズ。唯々其殖民地ガ往々衰亡ニ歸シ、或ハ他國ニ併有セラルヽ所以ノモノハ、人民ニ秋毫モ地方的自由ヲ賦與セズ、如何ナル起案權モ又如何ナル進歩ヲ

モ壓抑スル所ノ中央專治ニ過ギタル政治ノ不法ニ因セズンバアラズ。此點ニ付テ余ハ頃日佛國議院ノ最新報告書(千八百九十五年三月二日會議)中ニ此制度ヲ論難攻擊セル、ル、ミール、ド、ウイヒル氏ノ演說筆記ヲ看ルノ幸福ヲ得タリ。此制度ニ據レバ佛國殖民地中警察規則ヲ包含セル本國ノ法律ヲ全然施行スルモノ寔ニ僅少ニシテ、而モ其施行スベキコトハ法條中ニ記載セザルモノニシテ、單ニ地方分權ヲ賦與セザルベカラザル緊急ノ必要ニ迫マラレテ之ヲ施行シタルナリ。故ニ日本ハ佛國ガ過去ノ歷史ヲ規箴トシテ將來ニ拋棄スベキ所ノ原則ヲ採用センコト余ノ遺憾ニ堪ヘザル所ナリ。要スルニ日本ハ英國ノ例ニ倣ヒ自由ヲ殖民地ニ賦與スルハ德澤之ニ過ギズ、又危險ノ虞少ナシトノ事ヲ悟得スルニ若カズ。英國ハ加奈陀人ニ巴里ノ習俗ヲ襲用スルコトヲ許シタリ。故ニ其輕擧ヲ戒メ以テ後悔ヲ來タサヾリシ跡ヲ看ルベシ。故ニ滿洲人一般ニ及ブダケノ自由制度ヲ賦與シ、而シテ日本ノ若干良行政官ノミヲシテ之ヲ管理セシメ、渠等ノ舊慣中改良ノ必要アルモノハ極メテ簡潔ナル若干ノ特別法ヲ以テ之ヲ更革シ、其餘ハ之ヲ保存シ、渠等ノ土地ニ賢明ニシテ厚給莫大ノ權力ヲ賦與セラレ、司法官卽チ概言スレバ巧妙ニシテ仁惠的ノ司法行政ニ望マレタル總テノ擔保ヲ表示スル所ノ司法官ノ少數ヲ派遣スルヲ以テ可ナリトスルハ余ノ意見ナリ。而シテ此制度ト權衡ヲ保タンガ爲メニ、合圍地ニ對スル嚴法ヲ設ケ以テ他日起ルコトアルベキ反亂ヲ迅速ニ且有效的ニ鎭定セザルベカラズ。

之ヲ要スルニ軍略上殊ニ必要ノ觀ヲ呈スル所ノ遼東半島ニ付テ余ハ一ノ殖民制度ヲ建言スベシ。此制度タルヤ極メテ自由的ニシテ且殊ニ此半島ニ於テ及ブダケ最モ永遠ニ平和ヲ維持スルノ策ニシテ、隨テ司法上ノ點ニ於テハ甚ダ簡單ニシテ唯〻强固ナル武力ニ由テノミ平均ヲ得ル所ノモノトス。

(第二)　日本ガ全然獲取シタル臺灣及澎湖島ニ付テハ前者ニ反シ及ブベクダケ完全ニ之ヲ近似セシメ、隨テ此等ノ嶋嶼ヲ以テ現今ニ非ラザレバ將來ニ於テ帝國ノ眞ノ一縣ト爲サヾルベカラザルヲ信ズ。

清國ノ移民制度ニ異リ、善良ニ組織セラレ規矩其宜キヲ得タル日本ノ移民制度ヲ以テスレバ、該島嶼ノ人民ヲシテ近似化成セシムルハ恐クハ多年ヲ俟ツヲ要セザルベシ。而シテ公權ニ付テハ帝國ノ危難ヲ釀スコトナキガ故ニ、新臣民ニ速ニ莫大ノ權ヲ賦與シテ可ナルベシ。刑律ニ付テハ日本ノ刑法ヲ施行シテ可ナリ。私權ニ付テハ先ヅ彼土ノ習慣ヲ考査シ、以テ如何ナル手段ニ依リ又如何ナル進步ニ依リ日本民法ヲ漸次施行シ得ルヤヲ觀察セザル可カラズ。是レ佛國ガアルゼリー國ニ於テ爲シタル所ノモノトス。蓋シ同國ハ殖民地ニ非ズシテ眞ノ一州ヲ爲スト雖モ、仍ホ今日佛國ハ回々教徒ニ對スル法律ノ適用ニ關シ刑法及民法ヲ區別セリ。訴訟法ニ付テハ刑事訴訟法ヲ適用スベシト思考ス。但シ之ヲ適用スルモ被告人ニ負フタル擔保ヲ減少セズ。少クトモ初メハ民事訴訟法ノ甚ダ浩澣ナル且甚ダ費用ヲ要スル規則ヲ省略セザルベカラズ。法官ニ付テハ日本ノ構成法ニ倣ヒ無數ノ

階級ヲ組織シ、且東京ノ大審院竝ニ司法省ニ直屬スル所ノ下級裁判所及一ノ控訴院ヲ建設シテ可ナリ。次ニ合圍地ニ對スル法律ヲ制定スルコトモ亦必要ナリ。然レドモ遼東半島ニ設クベキ同法ヨリモ最モ寛ナラザルベカラズ。而シテ其適用ハ軍ノ司法權限ヨリ論ズレバ反亂ノ間ハ嚴正ニ之ヲ制限スルコトヲ要ス。

殊ニ最初ハ彼土ヲ東京ヨリ過度ニ統御スベカラザルヤ論ヲ俟タザル所ニシテ、總督及其部下ニ廣汎ノ權限ヲ委ネ、而シテ最初ノ間ハ英國ノ殖民地ニ類似セル地方立法會議ヲ建設セシメ、以テ人民ノ性情ニ如何ナル程度マデ渠等ニ或ル地方「自治制（セルフ・ガーベルヌマン）」ヲ許與シ得ルヤヲ看察スルヲ要ス。一言以テ之ヲ蔽ヘバ「原則ヨリモ寧ロ殖民地ヲ失フ」トノ有名ナル格言ヲ適用スベカラザルナリ。即チ同時ニ主法及助法ヲ施行スベカラズ。而シテ近似ヲ急遽ニ爲サズシテ之ヲ照準セズンバアラズ。

之ヲ要スルニ遼東半島ニ異リ、島嶼ニ付テハ眞ノ縣制ヲ建言スベシ。此制タルヤ此土ヲシテ漸次本土ニ完全ニ近似セシメ、隨テ司法制度ニ付テハ其制度ヲ適用シテ可ナルニ從ヒ漸次日本現行ノ制度ニ依據セシムル所ノモノタリ。

閣下

斯ク論ジ來リシ所ノモノハ甚ダ概略ニシテ且浩漠ヲ免カレズ。然レドモ余ハ本問ニ對スル精密ナル答ヲ爲スルニ付キ肝要ナル所ノ原素ヲ識ルニ非ザレバ、詳細ニ入リテ論ズルコト困難ナルヤ明ナリ。閣下若シ余ニ新占領地ニ對スル政府ノ意志及方針ヲ示シ、且該地ニ住居スル諸人民、其開明、其慣習、舊首長ニ對スル其性情ニ關スル書類即チ概言スレバ被治者ヲ正シク鑑識シ現行又ハ草案中ノ日本法律ヲ以テ渠等ノ習俗ヲ精確ニ比較シ、隨テ各屬地ニ適應スル所ノ司法及行政ノ制度ヲ眞實ニ決定スルニ付キ必要トスル所ノ書類ヲ示サレナバ、最モ深奥ニ本問ヲ研究シ且立法又ハ司法ノ草按ヲ編纂シ以テ閣下ノ問ハント欲スル所ニ答フルヲ得ベシト信ズ。

右謹デ具ス。

千八百九十五年四月二十二日

司法大臣　芳川顯正閣下　　ミシエル、ルボン

統治機關トシテノ印度省及殖民省

（トッド氏パーリメンタリー、ガバルメント抄譯）

千七百八十四年ヨリ千八百五十八年ニ亙リ印度ニ於ケル英國皇帝ノ領地ハ印度事務管理局ニ於テ之ヲ管掌セリ。此局ハ「ジョルジ」第三世卽位二十四年法律第二十五篇ニ依テ設置セラレタルモノニシテ、東印度會社理事局ト相待テ其事務ヲ處辨セリ。

然レドモ千八百五十八年此制ヲ廢シ、印度ニ於ケル大英國全般ノ管理ハ之ヲ皇帝ニ歸セシヨリ、印度ハ之ヲ殖民地ト看做スコトヲ廢シ、全ク大英帝國版圖ノ一部ト看做シ、印度大臣ヲシテ之ヲ管理セシムルコト、ナレリ。而シテ維多利卽位二十一年及二十二年法律第百六篇ニ依リ、從來東印度會社及印度事務管理局ノ有セシ權力ハ悉ク之ヲ印度大臣ニ有セシメタリ。而シテ東印度會社ハ維多利卽位三十六年法律第十七篇ニ依テ解散セラレタリ。

又維多利卽位三十九年及四十年法律第十篇ニ依リ英國皇帝ハ印度皇帝ノ名ヲ其皇稱ノ中ニ加フルヲ得、隨テ英國皇帝ハ印度ニ於ケル最上權ヲ有シ、唯印度ニ於ケル英國臣民ノミナラズ、百五十三箇ノ士民ノ邦國モ其權ニ從ハザルヲ得ズ。故ニ事實ニ於テ印度ノ王侯ハ今ハ一モ獨立ノ者アルコトナシ。卽チ此等ノ王侯ハ外國ニ對シ又ハ相互ノ間ニ宣戰スルコトヲ得ズ、英國トノ外條約ヲ締結スルコトヲ得ズ、又英國皇帝ノ裁可ヲ得ルニ非ザレバ其王位繼承ノ事ヲ定ムルコトヲ得ズ。又其邦國ヲ治ムルニ英國皇帝ノ勅許書ニ依ラザルベカラズ。而シテ勅許書ノ最大要件ハ英國皇帝ニ臣從スベキコトヲ誓フニ在リ。

千八百五十八年ノ法律ニ依リ印度事務參事會ヲ設ク、其會員ハ十五人ニシテ年俸千二百磅ヲ受ケ而シテ品行善良ノ間其職ニ在ルモノ（卽チ所謂修身官ナリ）ニシテ兩議院ノ奏請ニ由ルニ非ザレバ此ヲ動カスコトヲ得ズ。此參事會ハ印度事務ノ處辨ニ付印度大臣ニ勸告及補助ヲ與ヘ、且或ル範圍ニ於テ印度大臣ノ行政權ヲ制限スルガ爲メニ設ケタルモノナリ。蓋シ印度ニ於テハ代議政體ヲ施行セザルヲ以テ、大臣ノ權力ニ對シ制限ヲ加フル所ナキヲ以テ、此參事會ノ設アラザレバ專檀ニ陷ルノ恐アレバナリ。

參事會員十五人ノ內七人ハ東印度會社理事局ニ於テ理事中ヨリ之ヲ選擧ス。餘ノ八人ハ大臣ノ推薦ニ依リ皇帝之ヲ任命ス。然レドモ千六百六十九年ニ於テ議院ハ此選擧ノ組織ヲ廢止シ（是レ蓋シ東印度會社ノ解散ニ由ルモノナラン）再後缺員ハ總テ大臣之ヲ任命シ任期ヲ十年トシ、任期滿限ノ後更ニ五年間再任セシムルコトヲ得。然レドモ再任ハ公務ノ爲ニ必要ナル特別ノ理由アル時ニ限リ、其理由ハ議院ニ示サザルベカラズ。千八百七十六年ノ法律第七篇ニ依リ、大臣ハ專門若クハ特別ノ資格アル人ヲ參事會員ニ任ズ

ルハ三名ニ超ユルコトヲ得ズ。而シテ其選擇ノ理由ヲ示サヾルヲ得ズ。何トナレバ此等ノ人ハ退官ノ後恩給ヲ受クルノ權アルヲ以テナリ。

參事會ハ少クモ毎週一回會集ス、會議ニ於テハ大臣之ガ會長タリ、若シ大臣在ラザルトキハ大臣ノ命ジタル副會長其首席ヲ占ム。議題ハ會員多數ノ可否スル所ニ從テ之ヲ決ス。會長ハ會員トシテ表決スルノ外、可否ノ數相均シキトキハ裁定ヲ爲スコトヲ得ルナリ。然レドモ大臣ハ左ノ二類ノ事件ノ外ハ參事會ノ議決ヲ棄却スルコトヲ得。

一、印度ニ於ケル總督府ノ參事會員及各太守廳ノ參事會員ノ任命ニ關スル件

二、印度ノ歳入ノ支出ヲ定ムルノ件

右ノ場合ニ於テハ參事會ハ固ヨリ大臣ノ內意ナケレバ自ラ處辨スルコト能ハズト雖ドモ、大臣ハ其多數ノ決シタル所ニ從ハザルヲ得ズ。依テ他ノ場合ニ於テハ大臣ハ參事會ノ決議ヲ棄却スルコトヲ得ベシ。然レドモ各參事會員ガ大臣ノ處分ニ反對スルノ理由ヲ議事論ニ記留スルコトヲ許サザルヲ得ズ。此場合ニ於テハ大臣モ亦參事會ノ勸告ニ從ハザル所以ノ理由ヲ議事錄ニ記留セザルヲ得ズ。又大臣ハ參事會ノ內意ヲ待タズシテ命令ヲ發送スルコトヲ得、然レドモ參事會員之ニ不同意ナル者ハ其理由ヲ議事錄ニ記留スルコトヲ得、若シ參事會ノ多數之ニ不同意ナルトキハ、大臣ハ其命令發送ノ理由ヲ議事錄ニ記留セザルコトヲ得ズ。又大臣ハ祕密局ヨリ書信ヲ直ニ發送シテ參事會ヲシテ之ヲ知ラシメザルコトヲ得、然レドモ此書信直送ノ權力ハ之ヲ用ユルコト極メテ稀ニシテ、常例ノ事ハ大抵參事會ノ會議ヲ經ザルモノナシ。但參事會ハ立法ノ權力又ハ直接行政ノ權力ヲ有セズ、單ニ帝國政府ノ首要職務ナル檢閲監督ノ權ヲ施行スルニ關シ大臣ニ勸告ヲ與フルノ目的ヲ以テ組織セラレタル評議會タルニ過ギザルナリ。

參事會設置ノ當時ニ於テハ重大ナル問題ニ關シ大臣ノ擧指ノ自由ヲ制限スルヲ以テ反對ノ論囂々タリシト雖モ、漸ク經驗ヲ積ムニ隨ヒ其設置ノ可ナルヲ認ムルノ論出ヅルニ至レリ。殊ニ或ル印度大臣ノ職ニ在リシ政治家ノ說ニ依レバ、其在職ノ日參事會ノ爲ニ大ニ價値アル輔助ヲ得タルコト少カラズト云ヘリ。

今日參事會ハ大臣之ヲ分テ八局ノ委員ト爲シ、各委員五名若クハ六名ヲ以テ組織ス。故ニ參事會員ハ二局以上ノ委員ヲ兼ネザルハナシ。各局左ノ各事務ヲ擔任ス。曰ク財政事務、曰ク司法事務、曰ク軍務、曰ク政務、曰ク公共工事及鐵道事務、曰ク歳入事務、曰ク統計及通商事務、曰ク糧食事務是レナリ。各局委員ハ其事務ヲ擔任シ來信シタル事件ニ付意見ヲ附シ、其答案ヲ草シテ大臣ノ採擇ニ供シ、及參事會又ハ大臣ヨリ付託セラレタル事件ヲ討議ス。「チヤールス、ウード」氏印度大臣タリシ時ニ於テハ、常例又ハ形式上委員ニ書信又ハ他ノ文書ヲ付託スルノ外、各參事會員ニ就テ別箇ニ意見ヲ問ヒ、各員ヲシテ自由ニ所見ヲ陳述セシムルコト常ニシテ、困難ナル事件アル場合ニ於

テ「ウード」氏自ラ委員會ニ臨席シ其討議ニ加ハ、リ、爲ニ參事會ノ經驗アル勸告ヲ充分ニ利用スルコトヲ得タリ。是ニ由リテ「ウード」氏ト參事會トノ間ニハ意見ノ衝突ヲ來タスコト甚ダ罕ニシテ、其在職千八百五十九年ヨリ千八百六十六年ニ至ル長年限ノ間ニ參事會ノ決議ヲ棄却シタルコト僅ニ四回ニシテ、而カモ輕易ノ事件ニ關スルモノ、ミナリ。

然レドモ氏ニ繼デ大臣タリシ「スタツフオルド、ノルスコート」ノ時、卽千八百六十七年ノ三月ニ於テ甚重大ナル事件ニ付テ參事會ノ決議ヲ棄却セリ。此事ニ關シ下院ハ同年五月ニ於テ注意ヲ惹起シタリト雖モ大臣之ヲ詳ニ辯明シ下院ヲシテ滿足セシメタリ。

維多利卽位二十一年及二十二年法律ニ於テ、印度ハ總督ヲ置テ之ヲ統治セシムルモ、總督ハ印度大臣ノ指揮監督ヲ受クルモノトス。故ニ印度大臣ハ內外ニ對シ印度ニ關スル事件ニ付其責ニ任ズ。又印度ノ歲入ヲ保管スルノ責アリテ、之ヲ支出スルニハ皆大臣ノ認可ヲ要ス。而シテ其責任ハ單獨ニシテ分ツ所ナシ唯大臣歲入ノ支出ヲ拒ミタルトキハ其責參事會ニ歸スルノミ。

此組織ハ印度ノ土人ヲシテ英國ニ對シ好意臣從セシムルノ點ニ於テハ未ダ成功ノ著シキヲ見ズト雖モ然レドモ、內地ノ改良人民ノ衞生及犯罪ノ究治ニ付テハ頗ル成功ヲ見ルナリ。

印度大臣ト參事會トノ間及印度ニ對スル施政ノ權力ト議院トノ間ニ於ケル憲法上ノ關係ニ付テハ千八百六十七年千八百七十三年及千八百七十四年ニ於テ兩議院ニ於テ重要ナル討論アリ其結果大略左ノ如シ。

印度事務ノ管理ハ千八百五十八年ノ法律ニ依リ大臣之ヲ擔任シ、其措置ニ付テハ兩議院ニ之ヲ辯明シ、及其政治ニ關スル事件ニシテ議院ガ特ニ他ノ官職ノ裁決ニ依ラシムルコトヲ定ムルモノ、外ハ、總テ自己ノ責任ヲ以テ裁決スルノ責アリ。然レドモ法律ニ依リ參事會多數ノ意見ニ依リテ決スベキ事件卽チ印度總督及各大守ニ屬スル參事會員ノ任命及印度歲入ノ支出ニ關スル事件アル場合ニ於テ、大臣ノ意見參事會ニ於テ通過セザルトキハ、大臣ハ其事件ニ付自ラ其責ニ任ズルノ限ニアラザルナリ。

或ル論者ハ云フ政務上ノ事件ハ如何ナル種類ト雖モ多少經費ヲ要セザルモノ稀ナリ。而シテ參事會ガ拒否スルノ權力ヲ有スル歲入ノ支出ニ關スル疑問ハ、一信ヲ發シ一令ヲ下ス每ニ法文上又ハ解釋上ヨリ起ルベカラザルハナシト、然レドモ此說ハ大臣ト參事會トノ相互ノ權力ヲ規定スル議院ノ意志ニ非ザルコト明ニシテ、大臣ノ眞ノ責任ヲ壞了スルモノト云フベキナリ。大臣ノ權力ハ法文ニ由リテ制限セラルヽノミ。而シテ參事會ガ財務上ニ關シ拒否スルノ權力ハ唯財幣ニ關スル事ノミニシテ、之ヲ賜與シ若クハ其支途ヲ定ムルノ事ニ限ルノミ。蓋シ是レ之ヲ嚴ニスルニ非ザレバ以テ徒ラニ政治上ノ掛引ニ使用スルノ弊アルヲ恐ルレバナリ。大臣ハ印度ニ於テ如何ナル用務ヲモ人ニ命ズルコトヲ得ルナリ。而シテ大臣ノ許諾ナケレバ參事會ハ之ニ對スル報酬ヲ拒ムコトヲ得ザルナリ。

又參事會ニ委任セラルヽ制限的ノ權力ハ大臣ノ或ル行爲ニ對シ其權力ヲ羈絆スルニ在ルノミ。一

般ニ監制スルノ職權ヲ與ヘタルニ非ズ一般ニ監制スルハ實ニ下院ノ權力ニ在ルナリ。

或ル有名ナル前大臣ノ論ニ曰ク、下院ニハ本國近接ノ事務蝟集スルヲ以テ、印度ノ如キ廣大ノ境域ニ關スル事情ヲ知悉シテ印度大臣ノ行爲ヲ監督視察スルノ機會ヲ得ルコト難シ。故ニ參事會ヲ設置シ恰モ代テ大臣ノ行爲ヲ視察シ、其權力ヲ誤用スルコトナキヤヲ監セシムルノミ。是ヲ以テ若シ下院ニシテ印度ニ關スル事件ニ關與シ意見ヲ吐露スルコトアレバ、其時ヨリ直ニ參事會ノ職權ハ中止スベキモノタリ。蓋シ此憲法國ニ於テ參事會ガ下院ノ意見ニ反對スルハ暫クモ耐忍スベカラザルノ事タルナリ。

財幣ノ直接支出ニ關スル事件ニ關シテハ、大臣ハ他ノ事件ニ於ケルガ如ク參事會ノ決議ヲ棄却スルノ權力ナシ。然レドモ一般ニ監制スルノ權力ハ下院ニ存スルヲ以テ、下院ニシテ大臣ヲシテ其事ヲ行フノ責ヲ取ラシメント欲スルトキハ大臣ヲ贊輔スルヤ疑ナキナリ。大臣ハ此ノ類ノ問題生ズルトキハ毎ニ之ヲ下院ニ提出シ、以テ討論ヲ誘起ス。而シテ實際必要ナルニ拘ハラズ參事會ニ於テ反對スルコト明瞭ナルトキハ、大臣ハ下院ニ對シテ自己ノ意見ヲ主張シ、以テ其事ノ宜シク決行スベキヲ開說スルヲ得ルナリ。

印度ノ政治ハ所謂專制政治ナリト雖モ、大臣ハ議院ニ出デ、辯明スルコト能ハザルガ如キ擧措ヲ爲スヲ許サズ。故ニ其政體ノ名ハ乃チ然リト雖モ其實英國憲法ノ精神ハ印度ニ周到シ、最モ特絕ナル專制政治ハ代議政體ノ神髓ニ由テ裁判擔節セラルヽナリ。

又或ル一個人ノ苦情ニ關スル事件アル場合ニ於テ、下院ガ其事ニ關シテ情實ヲ知ルコト薄キニモ拘ハラズ、參事會ガ其職權內ニ於テ爲シタル決議ヲ棄却スルハ頗ル危險ナリトス。是等ノ場合ニ於テハ下院ハ特ニ委員ヲ命ジテ財務上ノ事ニ關シ其事ヲ審査セシムルコトヲ得ルト雖モ、其事ニ關スル委員ノ決議ハ未ダ法律上ニ於テ參事會ノ決議ヲ動スニ足ラザルナリ。下院自身其ノ決議ヲ爲ストモ雖モ亦然リ。何トナレバ議院ハ印度財政ニ關スル事ヲ處理スルノ任務ヲ親ラスルコトヲ肯テセズ、參事會ナル他者ヲシテ其任務ヲ執ラシムレバナリ（是レ蓋シ議院ハ法律ニ於テ參事會ニ財政事務ヲ決スルノ職權ヲ與ヘタルヲ云フ）若シ下院ニ於テ決議ヲ爲シ、由テ以テ印度政府ノ行政事務ヲ指揮スルガ如キハ參事會ノ排斥スル所ト爲ルノ恐アリ。且下院ハ其權力高大ナリト雖モ之ヲ用ヒテ印度政府ノ職權ヲ薄弱ナラシムルベカラザルナリ。

印度ノ歲入ハ總テ印度大臣及參事會ノ處理スル所ニ任ス。故ニ大臣及參事會ハ本國又ハ外國ニ於ケル印度ノ用務ノ爲ニ之ヲ支出スルコトヲ得、然レドモ印度ノ負債ハ下院ノ認可ヲ得ルニ非ザレバ之ヲ增加スルコトヲ得ズ。而シテ歲出ハ總テ之ヲ下院ニ報告セザルベカラザルナリ。

印度大臣ノ官職ヲ設置セシ以來、同大臣ハ毎年歲入歲出及有形無形ノ進步及前年間印度ノ情況ニ付報告ヲ作リ之ヲ下院ニ提出スルヲ通例トス。維多利卽位二十一年及二十二年法律第百六篇第五十三條ニ於テ此類ノ報告ヲ兩院ニ提出スベキコトヲ定メ、爾後數年間ハ嚴ニ此條ノ定ムル所ニ遵フニ

至ラザリシト雖モ、今日ニ於テハ敢テ之ヲ守ラザルコトナキナリ。

毎年議院會則ノ末ニ於テ全院委員會ヲ開キ大臣ハ印度ノ概況ニ付演說ス。此時ニ於テ特ニ印度ニ心ヲ用フル議員ハ或ハ質問ヲ爲シ或ハ勸告ヲ爲ス、此演說ハ固ヨリ印度ノ課稅ニ關シ決議ヲ要求スルモノニ非ラズ。唯下院ニ於テ前年ノ歲入歲出ヲ列記シタル形式上ノ決議ヲ爲スノミ。然レドモ此時印度ニ關スル政府施設ノ方針ニ付討議ヲ惹起スルコト往々アリ。

千八百六十八年六月十六日ニ於テ前會計年度ニ於ケル印度ノ會計決算表ニ印度會計檢查官長ノ報告ヲ添テ之ヲ下院ニ提出シタルニ由リ、下院ハ常置ノ會計決算審查委員ニ付託シ之ヲ檢閱シ、及其檢查ノ方法等ニ付審查スベキコトヲ命ゼリ。而シテ七月二十一日ニ至リ該委員ハ別ニ意見ヲ附スベキモノナキコトヲ報告セリ。

印度ノ政治ハ總督之ヲ統管ス。總督ハ廣大ナル行政權ヲ有ス。印度大臣總テ憲法上ニ於テ印度ノ行政ニ責任ヲ有スルヲ以テ、總督ノ行政權モ畢竟英國皇帝ノ憲法上ノ監制ヲ免ルヽコトヲ得ザルナリ。但此監制ハ政略上ノ問題ニ於テ行ハルヽノミ。行政上ノ細務ニ至テハ印度政府ノ責任ヲ以テ便宜處分スルコトヲ得ルナリ。

總督ハ戰ヲ宣シ和ヲ媾ズルノ權力ヲ有シ、歐洲人及土人ヨリ組織スル兵力十八萬八千七百八十六人ヲ有ス。然レドモ印度ニ於テ宣戰シタルトキハ適當ノ方式ニ從ヒ之ヲ英國ノ議院ニ通報セザルベカラズ。而シテ外邦侵寇ノ虞アルトキ又ハ不意ノ必要アル場合ノ外ハ其歲入ヲ以テ境外ノ軍事ニ使用スルニ兩議院ノ同意ヲ得ザルベカラザルナリ。

總督ハ其重大ナル職務ヲ執行スルニ參事會ノ補助ヲ待ツベキナリ。參事會員ハ十五人ニシテ任期ヲ十年トシ、行政及立法ノ職權ヲ有ス。此參事會ハ印度ノ最高參事會ト稱シ、千八百三十三年ノ法律ニ依リテ始テ設置セラレタル立法參事會ノ組織ヲ改正シテ設置スル所ナリ。其立法權ヲ行フ上ニ於テハ法律及規則ヲ制定スルコトヲ得ベクシテ、其法律規則ハ印度土人ニシテ英國皇帝ノ臣民タル者ヲ總テ束制スルモノニシテ、其境內ニ在ルト境外ニ在ルトヲ問ハザルナリ。又參事會ハ印度ノ政治ニ付何事ニモ拘ハラズ總督ニ勸告ヲ爲スコトヲ得、然レドモ總督ノ適當ト認ムル所ノ事ハ自己ノ責任ヲ以テ決行シ參事會ノ意見ニ從ハザルコトヲ得ルナリ。

最高參事會員六人ハ行政ノ事ニ任ズルモノニシテ、猶英國政府ニ於ケル大臣ノ如シ。但軍事總督ハ此外ニ在リ。此行政員ノ外ニ十二人ノ會員アリ、行政員軍事總督及此十二人ノ會員ヲ合シテ立法參事會ヲ組織ス。（前ニ參事會員十五人ト云フ然ルニ擧クル所ノ員數十五人ノ上ニ出ス再考ヲ待ツ）

英國皇帝ハ印度大臣ノ推薦ニ依リ親署ノ辭令ヲ以テ行政員及軍事總督ヲ任命ス。軍事總督ハ最高參事會ノ員外會員トス。此等ノ參事會員ハ特別ノ資格ヲ要シ、在職ハ皇帝ノ欲スル間ニ限ルモノトス。其三人ハ印度ニ於ケル職務ニ經歷アルヲ要シ、其一人ハ法律專門ニシテ、一人ハ財政ノ實務ニ

鍛錬ナルヲ要ス。司法及共工事ヲ擔任スル會員ハ内務大臣ノ指命ニ依リ印度内ヨリ任命スベキ者ハ總督ノ選用スル所ニ係ル。

印度ノ行政ハ之ヲ七局ニ分ツ、曰ク財政及商務、曰ク内務、曰ク軍務、曰ク公共工事、曰ク歳入事務、曰ク農務、而シテ立法ハ固ヨリ此外ナリ。行政員ハ各々一局以上ノ監督及辨理ニ任ズ各局ニ書記官ヲ置ク書記官ハ局務ニ關スル議事アルトキ參事會ニ列席ス。然レドモ決議ニ參與スルコトヲ得ズ。「ロルド、カンニング」侯ノ時ヨリ事務ハ總テ英國政府ノ内閣ニ於ケルガ如クニ處辨スベキコトヲ協定シ、各參事會員ハ自己ノ局務ニ於ケル細事ハ自ラ之ヲ裁決シ、重大ナル事件ニ限リ總督ノ意見ヲ問フベク、又英國皇帝ノ利益ニ關スル疑問ニ限リ最高參事會ヲ開テ之ヲ議スルコト、ナレリ。總督ハ外務局ノ政務即チ中央亞細亞、波斯灣、支那海ニ關スル政略及印度内若クハ印度ニ近接スル獨立又ハ半獨立國トノ關係ニ屬スル事件ヲ總督ス。千八百七十二年ニテハ總督自ラ公共工事ニ關スル事務ヲ處辨セリ。蓋シ當時未ダ公共工事ニ長官ヲ置カザリシヲ以テナリ。然レドモ維多利即位三十七年及三十八年法律第九十一篇ニ依リ公共工事ヲ指揮監督スベキ參事會員ヲ命ズルノ權ヲ附與セラレタリ。

行政員ノ外ノ參事會員ハ總督之ヲ任命シ任期ヲ二年ト爲ス。而シテ立法事務ニノミ關與スルモノニシテ、行政事務ニ關スル會議ニ列席スルノ權ナシ。此會員ハ其階級職業ノ何タルヲ論ゼズ又歐洲人タルト土人タルトニ拘ハラザルナリ。但少クモ其半數ハ在官者タラザルヲ要ズ。

總督ハ印度境内ニ於テハ何處タルヲ問ハズ參事會ヲ召集スルコトヲ得、而シテ其召集地ヲ管轄スル太守ハ員外トシテ參事會ニ列席スルノ權アリ、副太守ハ參事會立法事件ヲ議スルノ時ニ限リ亦員外トシテ列席スルコトヲ得ルナリ。

千八百三十三年東印度會社ノ特許ヲ更新セシヨリ以來、土人ニ官職ヲ奉スルコトヲ許シタリ。然レドモ立法事務ニ參與スルコトヲ許シタルハ千八百六十一年ノ法律制定以後ニ屬ス。今日土人ノ太守ノ管轄地ノ立法事務ニ參與スル者功績亦少カラズ、千八百六十七年總督ハ印度内各官吏ニ令シ、土人ガ英國的ノ政治ト土人的ノ政治トヲ視テ孰レカ勝レリト爲スヤヲ密報セシメ其報告ヲ議院ニ提出シタリ。

印度ノ立法參事會ハ千八百三十三年及千八百五十三年ノ法律ニ依リ設置スル所ニ係ル、然ルニ行政府ト一致ヲ缺キ事務滿足ニ行ハレズ、蓋シ該參事會ハ設置ノ主旨ヲ誤解セシナリ。抑モ該參事會ヲ設置スルノ目的ハ唯立法ニ關スル職務ヲ與フルニ過ギズシテ、之ヲ以テ議會ト爲スノ主旨ニ非ザリシナリ。然ルニ參事會ハ自ラ爲テ議會ト思惟シ、人民ノ疾苦ヲ討論救濟シ、及歳入ノ支出ヲ拒否スル等ノ權力アリト爲シタリ。因テ其組織法ヲ更正スルノ必要ヲ認メ、千八百六十一年ノ法律ヲ以テ之ヲ更正セリ。此法律ニ依レバ、總督ハ參事會事務處辨ノ規則ヲ制定シ及印度ノ安寧ヲ保ツ爲ニ

緊急ノ場合ニ於テ自己ノ責任ヲ以テ命令ヲ發スルノ權アリ。但此緊急命令ハ施行六箇月以前ニ出ツルコトヲ得ザルナリ。

參事會ノ議定シタル法律規則ハ總督ノ認可ヲ得ルニ非ザレバ效力ヲ生ゼズ。又公債歲入、宗教、陸海軍及外交ニ關スル議案ハ豫シメ總督ノ許可ヲ得ルニ非ザレバ參事會ノ會議ニ付スルコトヲ得ズ。而シテ參事會ノ議定シタル法律及規則ハ印度大臣ノ奏議ニ依リ皇帝ハ何時ニテモ之ヲ拒否スルコトヲ得ベキナリ。參事會ノ會議ニハ傍聽ヲ許ス。

立法參事會ハ印度ノ行政府ニ重要ナル功用アリト雖モ其職掌ハ單ニ參贊翼成スルニ在ルヲ以テ其參事會員タルモ實際ノ行政若クハ政略ヲ牽制指導スルノ勢力ヲ有スルコト少シ。參事會ノ議定シタル法律ハ印度大臣之ヲ認可シタル後之ヲ議院ニ提示ス、參事會ニ於ケル總督ハ十二箇ノ州政及百五十三箇ノ邦團ヲ直接ニ統管ス。

千八百六十一年ノ法律ニ代リ「フオルト、セント、ジヨルゲ」「ボンベイ」及「ベンガル」三州ノ太守ハ最高參事會ノ組織ニ倣ヒ立法參事會ヲ設置スルコトヲ得、此地方參事會ハ各州ニ行フベキ法律ヲ議定スルノ權アリ。然レドモ豫シメ總督ノ許可ヲ經ルニ非ザレバ印度全般ニ影響スル事件ヲ討論スルコトヲ得ズ、又同法律ニ依リ總督ハ西北及其他ノ各州ニ同樣ノ立法參事會ヲ設立スルコトヲ得ベシ。然レドモ未ダ此等ノ各州ニ之ヲ設置セズ。

又同時ニ州ノ大都邑ニ市制ヲ行フコトヲ許スヲ以テ漸次ニ地方自治ノ慣習ハ發達セリ。

州ノ參事會員ハ評議ノ職ヲ執ルノミナラズ又部局ノ事務ヲ擔當ス。

千八百六十年六月三十日印度大臣ノ奏請ニ基キ勅令ヲ以テ印度大臣ノ評議會ヲ設置ス、此評議會ハ次官二人次官補一人及前ニ揭ゲタル參事會員十五人ヲ以テ組織ス。大臣ノ俸給ハ五千磅政務次官ハ千五百磅常置次官ハ二千磅次官補ハ千二百磅ナリ、參事會員ハ十五人ハ各千二百磅ヲ受ク。

印度省ノ經費ハ總テ印度ノ歲入ヲ以テ支辨シ、印度省ノ便宜ノ爲ニ建設スル建物ト雖モ亦歲入ヲ以テ其費用ヲ支出ス、印度總督ノ俸給ハ二萬五千磅ニシテ此外ニ每年一萬二千磅ノ加俸ヲ受ク。

印度大臣及次官一名ハ下院ニ議席ヲ占ム、然レドモ參事會員ハ議院ニ議席ヲ占メ及表決スルノ權利ナシ。

印度ニ送付スベキ書信案ハ擔任部局ノ書記官之ヲ草シ次官之ヲ訂正シ大臣ニ呈ス。大臣ハ之ヲ視テ修正スベキモノハ修正ヲ加ヘテ擔任ノ委員ニ付ス、委員之ヲ審査シ修正ヲ要スルトキハ之ヲ修正シテ大臣ニ返付ス、大臣ハ乃チ之ヲ參事會ニ呈出シテ同意ヲ求ム、重大ナル事件ニ關スル書信ハ之ヲ印度ニ送付スル前ニ心ズ大臣ノ認可ヲ經且大臣ノ署名ヲ得ザルベカラズ。小事ハ大臣ニ問ハズ委員長又ハ部局ノ書記官ヨリ直ニ之ヲ送付ス。

植民省

英國植民地ノ監督及管理ハ一千六百六十年ニ於テ樞密會議中ノ一委員ニ委任シ、之ヲ在外植民會議委員ト云ヘリ。其後此委員ハ貿易會議委員ト合併シ植民地貿易事務局ト稱セリ。此事務ハ爾後許多ノ變遷ヲ經タルモ今爰ニ之ヲ言フヲ要セズ北米植民地大半ヲ失ヒシ（米國ノ獨立シタルヲ云フ）ヨリ全ク組織ヲ變更シ、此事務局ヲ廢止シ在留スル植民地ハ內務省ノ管轄ニ歸シタリ。然レドモ第十八世紀ノ末革命戰爭ノ起ルニ及ンデ、一千七百九十四年ニ於テ新ニ軍務省ヲ創設スルコト必要トナリ。一千八百一年ニ於テ植民地ニ關スル事務ヲ擧テ此軍務省ニ合併セリ。爰ニ於テ軍務及植民大臣ノ官職ヲ永久ニ設置スルコトヽナレリ。平和回復ノ後植民地ノ事務ハ軍務及植民省ニ蝟集シ、益々重大トナリ、一千八百五十四年歐洲戰爭ノ再起スルニ及ンデハ軍務ヲ割テ一省ヲ新設シ專ラ軍事ヲ統管セシムルコトヽナレリ。

植民大臣ノ職任ハ今ヤ專ラ英國ノ許多ノ植民地ヲ統管スルニ在テ植民地ヲ治ル法律及慣例ノ施行ニ關スル行政及植民地ノ利益ニ關スル事ハ皆此大臣ノ監督及管轄スル所ナリ。故ニ此大臣ハ輓近英國ニ於テ採用シタル植民地自治ノ主義ニ從ヒ此利益ニ關スル事ヲ監督シ、其政治ヲ指揮ス又植民地內外ノ防備ノ爲ニ必要ナル兵力ヲ配置スルノ權アリ、但此事ニ關シテハ軍務大臣ト協力ス。

植民大臣ノ權力ハ首トシテ植民地ノ太守ノ任免及植民地議會ノ議定シタル法律ヲ許否スルニ在リ、植民ノ事ニシテ大英帝國ノ一部トシテ其幸福ニ關スル者ニ付テハ植民大臣ハ英國政府ノ意見ヲ植民太守ニ通信シ、及植民地參事會ノ會議ヲ輔導スルガ爲ニ勸告ヲ爲シ、以テ在植民地ノ英國臣民ノ幸福ヲ增進ス、又植民地ニ立法議會ヲ設置スルノ法律案若クハ植民地ニ於ケル官有地ノ賣却ニ關スル法律案若クハ移住人ノ保護ニ關スル法律案ノ如キ特ニ植民地ニ關スル法律案ヲ起草シテ英國議會ニ提出スルハ植民大臣ノ職掌ナリ。

樞密會議中ノ貿易委員ハ前ニ述タルガ如ク舊ト植民地ノ事務ヲ處辨シタルモノナルガ、今猶其一部分ヲ存留セリ。其植民地ヲ管理スルノ權ハ已ニ廢スルコト久シキト雖ドモ、此委員ハ皆卓絕ナル人ヲ以テ組織シ且植民地ノ事ニ關シテ大ニ經驗アル者少カラザル故ニ、輓近其舊時ノ職掌ノ一部ヲ回復シ、植民大臣ヲシテ植民地ニ關スル重大ナル事件ニ付テハ此委員ニ諮詢セシム。植民大臣ハ其職務上此委員ノ一員タルガ故ニ、諮詢ヲ必要トスル場合ニ於テハ植民大臣ハ此委員ヲ召集シ之ト計謀シ其輔助ヲ求ムルナリ。其諮詢ヲ經タル事件ハ左ノ類ニ屬スルモノトス。

喜望峰及濠洲ニ於ケル植民地ニ憲法政治ヲ許サントスルノ議及現在ノ政治組織ノ下ニ於テ該植民地內地方政廳ノ權利ニ關スルノ議。

植民地ニ於ケル皇帝ノ官吏ト植民地官吏トノ爭議及植民地ニ於ケル內地改良ニ關スルノ議。

植民地ニ於ケル重大ナル利益ニ對スル施政ニ關スルノ議。

此等ノ事件ハ植民大臣ヨリ之ヲ貿易委員ニ諮詢シ、貿易委員ハ精細ニ之ヲ審議シテ報告ス。此報告ハ之ヲ議院國民及植民地ニ公示シ、以テ政府ガ其事件ノ審査及決定ニ付可及的好注意ヲ與ヘタルノ證ト爲スナリ。

英國政府ノ方針ハ、多年來漸次總テノ植民地ニ自治ノ政治ヲ施行スルヲ目的トス。唯代議政體ヲ施スニ障碍トナルモノハ、或ル植民地ニ於テハ未ダ自治ノ特權ヲ利用スルコト能ハザル土民ノ許多ニシテ、而シテ歐洲種族猶少ク且增減常ナキニ在リ歐洲人種ノ移住者ト土民トハ利益ノ撞着ヲ來タスコト少カラザルヲ以テ、此等ノ植民地ニ於テ英國ノ模範ニ從ヒ代議政體ヲ行ハントスルハ、縱令實行スベカラザルニ非ザルモ、之ヲ實行スルハ不公平タルヲ免レズ。卽チ印度、錫蘭、「モウリシヨス」及「ナタル」ノ植民地ノ如キハ此類ニ屬ス。此等植民地ハ乃チ太守及參事會アリテ之ヲ治ム。而シテ先例ナキ事件又ハ非常ニ重大ナル事件アルトキハ、植民大臣ノ指揮ヲ求ムルヲ必要トス（印度ハ此例ニ在ラズ）自治ノ政體ヲ設立シタル植民地ニ於テハ植民大臣トノ通信往復大ニ減少セシガ故ニ、植民大臣ノ煩勞ハ隨テ減少セリ。植民地事務ニ關シ皇帝ノ直接監督ハ外交事務ニ於ケルガ如ク萬般ノ事ニ涉ラズ。植民省ノ通信往復ハ大抵常務ニ屬スルモノニシテ、先例ナキノ事又ハ重大ナル事多カラズ。故ニ皇帝ハ唯重大ナル決議ヲ聞クノミニシテ、各般ノ通信ハ一々之ヲ奏聞スル限ニアラズ。植民大臣ハ植民地太守ノ行爲ニ付キ直接ノ責任ヲ有セリ。故ニ其太守ヲ任免スルハ植民大臣ノ權ニ在リ唯總理大臣ノ認可ヲ經ルヲ要ス。而シテ重要ナル植民地ノ太守ノ任免ニ付テハ總理大臣ノ意見大ニ重キヲ爲スナリ。植民地太守ハ國璽ヲ鈐シタル辭令ヲ以テ任ゼラレ（我國ノ勅任ナリ）而シテ直接ニ植民大臣ノ指揮及訓示ヲ受ケ事務ヲ處辨ス。植民地太守ノ權力性質及廣狹ハ植民地ニ從テ同一ナラズ、自治ノ政治ヲ施行スル植民地ニ於テハ太守ノ權力頗ル制限アリテ、其位地殆ンド本國ニ於ケル皇帝ト相似タリ。唯其異ナル所ハ太守ハ皇帝ノ官吏ニシテ、實ニ植民地及本國ヲ連接スル鏈環タルニ在ルナリ。他ノ植民地ニ於テハ太守ノ權力頗ル重大ナリ。然レドモ植民地ノ政體ニ從ヒ同一ナラザルナリ。

植民大臣ガ植民地ノ官吏ヲ任免スル權力ハ名義上頗ル大ナリ。植民地ニ自治政治ヲ施行セシヨリ以來自治政ヲ行フ植民地ニ於テハ官吏ノ任免ハ概シテ植民地行政參事會ノ推薦ニ從フ。他ノ植民地ニ於テハ植民大臣ノ權力稍大ニシテ植民地書記官及太守ノ秘書官ハ大臣之ヲ任ズ、但シ通例太守ノ推薦ニ從フナリ。宗教ニ關スル官職ニ就テハ皇帝任免ノ權ヲ有スル植民地ニ於テハ僧正ハ、植民大臣「カントルブリー」ノ大僧正ト協議シテ之ヲ推薦ス。一千八百五十年頃マデハ僧正ノ職ハ通例英國ヨリ僧侶ヲ送テ之ニ就カシメタリ。然レドモ爾後官吏任用ノ例ニ從ヒ、植民地ニ於テ適任ノ人アルトキハ其人ヲ任用シ本國ヨリ送ルコトヲ爲サズ。司法官ハ大植民地ニ於テハ亦同ジク該植民地ノ

法律家ヲ以テ之ニ任ズ。小植民地ニ於テ或ハ本國ヨリ或ハ他ノ植民地ヨリ之ヲ送テ其職ニ就カシム。他ノ文官及宗教上ノ官職ハ太守又ハ僧正ノ推薦ニ依リテ之ヲ任ズ。故ニ植民地ニ於ケル高等官ハ概シテ皇帝親署ノ辭令ヲ以テ任ズルト雖モ、實際ニ於テハ皆太守ノ推薦ヲ採用シ其人ハ植民地ニ居住スル者ヨリ選ムナリ。

植民地太守ハ國璽又ハ親署アル辭令ヲ以テ皇帝ノ欲スル間任ゼラルヽモノ(卽チ修身官ニアラズ)ニシテ、何時ニテモ皇帝ノ權力ヲ以テ豫ジメ通知ヲ爲サズ、又理由ヲ示サズシテ免ズルコトヲ得ベシ。其任命ハ通例六年ヲ以テ一期トス。蓋シ太守ハ其統轄スル植民地ト全ク密接ノ關係ヲ絕ツニ非ラザレバ其擧措ノ公平ヲ保チ難ケレバナリ。然レドモ或ル場合ニ於テハ植民大臣ノ處置ヲ以テ其期ヲ延スコトヲ得ルナリ。植民地太守ノ俸給ハ大抵植民地ノ歲入ヨリ支給ス。但小植民地ニ於テハ合衆王國ノ歲入ヨリ支給スルヲ以テ、每年議院ノ議決ヲ要スルナリ。然レドモ太守ハ少シモ植民地議會ノ牽制ヲ受ケザルヲ必要トスルガ故ニ、其俸給ヲ植民地歲入ヨリ支給スル處ニ於テハ、法律ニ於テ太守ハ其俸給ヲ增加スルノ議決ヲ認可スルヲ得ズ。議會ハ皇帝ノ裁可ヲ經ルニ非ザレバ其俸給ヲ減ズルヲ得ザルコトヲ定ム。代議政體ヲ施行スル植民地ニ太守タル英國衆議院ノ如キ適當ノ學校ナキナリ。然レドモ太守ノ俸給薄少ナレバ其儀式ヲ保チ及欵待ヲ施スニ足ラズシテ、往々私財ヲ費スニ非ザレバ其體面ヲ保ツコト能ハズ。故ニ衆議院議員ヲ誘テ太守ノ官職ニ就カシムルハ頗ル難シトス。實ニ其俸給ノ薄少ナル、私財ヲ費スニ非ザレバ其官職ノ威嚴ヲ保ツ能ハザル者少カラズシテ、隨テ欵待ヲ施スニ吝ナルニ至ル。蓋シ植民地ニ於テハ意見ノ同ジカラザル人士ヲ官舍ニ招待シ、以テ其他ノ重ナル人士間ニ於ケル意見ノ衝突ヲ調和スルヲ必要トスルコト頻數ニシテ太守タルモノ最モ重要ナル職務亦コヽニ在リ。而シテ是レ皆欵待ヲ以テスルニ非ザレバ圓滑ニ處スルコト能ハザルナリ。

植民地太守ノ位地ハ維多利卽位二十八年、及二十九年法律第百十三篇、竝ニ三十一年及三十二年法律第百二十八篇ヲ以テ植民大臣ヲシテ太守ニ或ル在職年期ノ後恩給ヲ給與スルコトヲ得セシムルニ由リテ稍改良ヲ加ヘタリ。

總テ植民地ノ議定シタル法律ハ植民大臣ノ考査ヲ經ルヲ要ス。植民大臣ハ之ヲ法律ニ明ナル官吏ニ付シテ審査セシム。其官吏ハ之ヲ審査シ其缺點ヲ指摘シ其可否ヲ講究シテ報告ス。其法律ノ單ニ植民地內部ノ事務ニ關スル者ハ特ニ反對ノ理由アルニ非ザレバ該審査官ノ報告ヲ待テ之ヲ認可セザルコト稀ナリ。然レドモ其法律ニハ用語ニ誤謬少カラズ、此等ノ誤謬アルトキハ植民大臣ヨリ之ヲ太守ニ通知シ、太守ハ之ヲ議會ニ報告シテ速ニ修正セシム。其誤謬重大ナラザルトキハ議會ノ修正スル間施行スルヲ妨ゲズ。然レドモ皇帝ノ裁可ヲ得ンガ爲ニ奏上スルコトヲ爲サズ。植民地ノ法律每年審査ヲ經ルモノ甚ダ多シ。而シテ其大部分ハ唯概略審査スルニ過ギズ。然レドモ時トシテ頗ル精

細ニシテ且重大ナル疑問ヲ惹起スルコトアリ。曩ニハ此等法律ヲ審査スル職務ハ植民地ノ土地及移住局ニ於テ之ヲ掌リシヲ以テ、今日ニ於テモ其土地及移住ニ關スル法律ハ猶同局ニ於テ之ヲ審査ス。

植民省ノ事務ハ歎美スベキ組織ヲ以テ處辨ス。省中五局ヲ設ケ各植民地ノ事務ヲ分擔ス。郵便到着スルトキハ受付ノ官吏之ヲ開キ其書類ヲ擔任局ニ送致ス。局長之ヲ披讀シ直ニ其事件ニ關スル意見ヲ附シテ之ヲ常置次官ニ送ル。常置次官又之ヲ讀ミ意見ヲ附シテ政務次官ニ送ル。政務次官亦之ニ意見ヲ附シ大臣ニ呈ス。大臣ハ各下僚ノ附シタル意見ヲ參酌シテ其事ヲ裁決シテ意見ヲ附記ス。其ノ意見ハ卽チ回答ノ主旨トナルナリ。若シ其事重大ニ屬スルトキハ大臣自ラ回答案ヲ草シ、或ハ回答スベキ主旨ヲ略記シテ答案ヲ草シテ決判ヲ受ケシム。此ノ如クニシテ百般ノ事務皆大臣ノ直接ニ看ル所トナル。

省務ノ誠實ニシテ遲緩ナラザルコトヲ要スル爲メニ、大臣ハ二週間毎ニ一回事務ノ處辨ヲ了セザルモノ、報告ヲ爲サシメ、以テ何件ノ稽留スルヤヲ見ル、事件ヲ下僚ニ分配スルノ職務ハ常置次官ノ擔任スル所ナリ。

省及植民地ノ土地及移住局ニ於ケル官吏及書記ノ任命ハ大臣ノ權ニ在リ。

植民地ノ土地及移住局

此局ハ植民省ニ附屬スル一局ニシテ其設置久カラズ。其始一千八百三十一年ニ於テ植民大臣移住ノ事ヲ審査セシムル爲メニ委員ヲ設ケタルニ起ル。其委員ノ書記官「イリヨット」氏審査事件終了ノ後植民省ノ官職ニ就キ移住ノ事ニ關スル通信往復ノ事ヲ擔任セリ。一千八百三十七年ニ於テ「イリヨット」氏移住總辨理ノ名稱ヲ受ク、一千八百四十年ニ於テ今日ノ局ヲ設ケ「イリヨット」氏及他委員二名ヲ以テ之ヲ組織セリ。一千八百四十六年從前植民省ニ於テ掌リシ植民地法律ヲ審査報告スルノ職務ヲ此局ニ移シテ掌ラシメ、其後缺員アルヲ待テ法律專門ノ人ヲ以テ其官ニ任シ一千八百四十七年局ノ組織ヲ改正シ左ノ事項ヲ擔任セシメタリ。

一、植民大臣ノ付託ヲ待テ植民地ニ於ケル土地ニ關スル疑問ヲ審査スルコト、該土地ニ關スル要求ニ付報告ヲ爲スコト、礦山ノ免許狀ヲ草スルコト及該土地及移住ニ關シ勅令案ヲ草スルコト。

二、各方ノ植民地殊ニ濠洲ニ至ルベキ移民人ノ運搬ニ關スル一切ノ事務ヲ處辨スルコト、此職掌ノ爲ニ此局ハ渡航者法律ニ關スル行政ヲ掌リ且時ニ該法律ノ修正ヲ草ス此法律ハ貧民自費ヲ以テ移住スル者ニ關スル規程ナリ。

三、各植民地ニ關スル報告ヲ頒布シ移住者ノ便ニ供スルコト。

四、特ニ植民地ノ土地及移住ニ關スル各植民地ノ法律及命令ヲ審査スルコト。

植民地ノ土地ニ關スル疑問ニ付報告スル事ハ從前頗ル煩雜ナリシト雖モ、輓近此等ノ疑問ハ概シテ植民地議會ヲシテ擔任セシムルコトヽナリシヲ以テ之ニ關スル此局ノ事務ハ大ニ減少セリ。

英國ヨリ移住スル者ハ輓近大ニ減少セシト雖モ此局ハ渡航者法律ヲ施行スルノ職務アルガ故ニ（此法律ハ維多利即位十八年及十九年法律第百十九篇ニ於テ創定シ同二十六年及二十七年第五十篇ヲ以テ改正スル所ニ係ル）各外港（本税關ヲ置カザル港ニシテ本邦ノ輸出港ノ如キモノカ）ニ於テ移住ニ關スル吏員及其他移住ニ關係スル者ト通信往復スル事務頗ル頻繁ナリ。

此局ハ印度亞弗利加及支那ヨリ「モウリシヨス」及西印度ニ移住スル者ヲ監督若クハ管理スルノ任アリ。故ニ其支配方及此等ノ植民地ニ於ケル傭者被傭者ノ關係ヲ定ムル法律ニ付審査報告スルノ職務ヲ有ス。

此局ハ現今ノ常置ノ委員二名ヲ以テ組織ス、是レ一千八百五十三年衆議院ニ於ケル官務審査委員會ノ報告ニ基キ其數ヲ減ゼシナリ。總テ常務ハ委員ノ責任ヲ以テ決行シ植民大臣ハ唯一般ノ指揮ヲ與フルノミ。然レドモ重大若クハ困難ナル事件アルトキハ委員ハ大臣ト協議ス委員ハ毎年移住及植民地ノ土地ニ關スル事件及其他各般ノ事ニ關シ報告ヲ編製シ之ヲ植民大臣ニ呈ス此報告ハ議院ニ提出セラルヽナリ。

此局ハ一千八百五十三年ニ於テ其組織ヲ改メ移住報告局ト稱スルコトヽナレリ。蓋シ植民地ニ自治ノ政治ヲ許スコト漸ク多ク、且植民地ノ官有地ヲ各地ノ政府ニ讓渡シタルヨリ、此局ノ職掌過半ハ自然ト廢セラレタルニ由リ、遂ニ之ヲ改メ局長及次官ヲ置キタリ。然ルニ此局ノ職掌ハ輓近貿易事務局ニ移サレ今日植民省ニハ一ノ移民局アルノミ、移住局ノ職掌ハ植民地ニ移住セント欲スル者ニ偏頗ナキ充分ナル報知ヲ與フルニ在リテ書記之ガ長タリ。俸給六百五十磅。

內閣總理大臣ヨリ臺灣總督ヘノ訓令

今回勅令ヲ以テ貴官ヲ簡拔シ、授クルニ臺灣總督兼軍務司令官ノ重任ヲ以テセラレタルハ、深ク貴官ノ材能果決ニ信倚セラルヽニ由ルヲ以テ、今更ニ項目ヲ臚列シテ詳細示教スルノ要ナキガ如シト雖モ、剏メテ諸般ノ政治ヲ新領土ニ施ケルニ當リ、必ズ先ヅ其要旨ヲ概定セザルベカラズ。殊ニ事ノ外交ニ涉ルモノニ至テハ、貴官ト締盟各國領事官ト直接應對セラルヽノ場合アルベキヲ以テ、豫ジメ其執務上ニ於ケル項目ヲ列記シ、以テ政府ト貴官トノ間ニ軒輊ナキヲ期スルノ要アリ。仍チ本官ハ貴官方ニ重任ヲ帶ビテ前往セラルヽニ際シ、　詔命ヲ奉承シテ左ニ其大綱ヲ開示ス其意專ラ貴官ノ重任ノ執行ニ資セントスルニ存シ、固ヨリ貴官ヲ掣肘セントスルニアラザルハ亦辯ヲ俟タザル所ナリ。若夫レ將來豫知スベカラザル事情生ジ而カモ其性質急激ニ屬シ、政府ニ電稟シテ命ヲ待ツノ暇ナキ場合アラバ、貴官ハ本訓令ノ明文ニ適合セズト思料セラルヽモノト雖モ臨機專行シテ後其顚末ヲ報告スルコトヲ得。

媾和條約ノ明文ニ據レバ批准交換後清國ヨリモ直ニ全權委員ヲ簡派シ、該交換ノ日ヨリ二ケ月以內卽チ明治二十八年七月八日マデヲ限リ臺灣及澎湖ノ兩島竝附屬諸島ノ引渡ヲ結了セザルベカラザルニ依リ、貴官ハ左ノ諸項ニ準據シ豫ジメ清國全權委員ト會同シ其引渡ノ日時場所等ヲ商議決定セラルベシ。

一、臺灣澎湖兩島竝附屬諸島及砲臺軍庫清國文武官ノ管理セル官有物件受渡ニ關スル公然ノ手續ハ成ルベク速ニ完結シ貴官ハ直ニ　御名ヲ以テ新領土ヲ嗣後統治スルノ意ヲ公布セラルベシ。其公布文ハ適當ノ期間ニ於テ貴官ニ送達スベシ。

二、清國文武官ノ管理セル官有物件ニ就キ豫ジメ詳細ノ目錄ヲ調製セシムルヲ要ス。然レドモ成ルベク速ニ公然ノ手續ヲ完結スル爲メニ、先ヅ大要ノ目錄ヲ製シテ其授受ヲ終リ詳細ハ追テ調製スルコトヲ得。

三、清國ガ占有スル城壘、兵器製造所及ビ凡ソ清國文武官ノ管理スル諸官有物ノ引渡ヲ受ケ、之レト同時ニ清國軍隊ノ佩帶スル兵器ヲ取揚グベシ。但シ荷物及私有物ハ携帶スルヲ許容スルモノトス。

四、清國軍隊ハ成ルベク速ニ撤去セシムルヲ要ス。其全ク撤去スルマデノ間ハ我軍隊司令官ハ清國軍隊ノ退キ駐在スベキ地ヲ指定命令スベシ。之レト同時ニ於テ彼ノ撤兵ノ期日ヲ確約スルヲ要ス。但シ彼ノ駐兵スル間ノ費用ハ凡テ清國自ラ支辨シ一切我ニ於テ關セザルベシ。

五、清國軍隊ハ成ルベク速ニ撤去セシムルヲ要スルヲ以テ貴官ハ清國全權委員ト撤兵ニ必要ナル手續ヲ商定セラルベシ。若シ彼ニ於テ其手續ノ商定ヲ拒ミ、又ハ之ヲ怠ルトキハ、清兵ヲ最近ノ清領港マデ無料ニテ乘船セシムベシ。其止ムヲ得ザル場合ニ於テハ貴官ハ强迫シテ撤兵ヲ促サルベシ。但シ無賃ニテ清兵ヲ乘船セシムル場合ニ於テハ途中其暴行ヲ防グニ必要ナル準備ヲ設クベシ。

六、清國軍隊全ク撤兵シタル後ハ豫テ取揚ゲ置キタル兵器ヲ清國政府ニ返還スベシ。

七、批准交換後二ケ月以内ト雖モ引渡ノ事終ラバ總督府ニ於テ直ニ行政事務ヲ施行シ清國軍隊ヨリ引渡シヲ受ケタルモノ、外其他ノ官有物ヲモ占有スベシ。

以上ハ條約上ノ期限内ニ於テ平穩受授スル場合ニ於ケル手續ヲ概擧シタルモノナルモ、萬一彼ニ於テ期限内ニ全權委員ヲ簡派セズ、或ハ引渡ヲ拒ミ若クハ引渡ヲ怠リタル場合ニ於テハ、條約上ノ割地ハ批准交換後當然我主權ノ下ニ在ルモノナルヲ以テ、臨機處分シ、其止ムヲ得ザル場合ニ於テハ兵力ヲ以テ强制執行スベシ。若シ捕虜アルトキハ戰時捕虜ト同一ノ取扱ヲ爲シ、追テ釋放スベモノトス。而シテ引渡手續ノ强制ニ出タルト協議ニ由ルトニ論ナク、既ニ我版圖ニ歸シタル以上ハ專ラ人民ノ撫育ヲ圖リ、全島ノ治安ヲ保持シテ各々其堵ニ安ゼシムルヲ要ス。然レドモ亦須ク軍令ノ下ニ庶般ノ政治ヲ施シ所在人民ヲシテ押侮ノ心ヲ生ゼシムベカラズ。恩威竝行能ク其事情ヲ詳悉シ以テ其行政組織ヲ實施スベシ。今其要項ヲ左ニ列擧ス。

總督府

祕書官參事官之ニ隷ス

總督府中部門ヲ分ツコト左ノ如シ

一、治民部

一切ノ行政ヲ施行シ教育技藝等ヲ掌ル。

二、財務部

租稅海關稅及會計事務ヲ掌ル。

三、外務部

臺灣ニハ淡水鷄籠、臺南府、打狗ノ四開港場アリテ外國人ノ居留スルモノ少カラズ清國ハ既ニ臺灣ニ於ケル主權ヲ失ヒタルモノナレバ、我ニ於テ清國ト各國トノ間ニ存立シタル條約ヲ受繼グニアラズト雖モ、我政府ハ任意ヲ以テ舊來ノ開港場ニ外人ノ從來居住及其他從來ノ接遇ヲ受ケシムルニ付テハ、先ヅ彼等ヲシテ安堵セシムルヲ要ス。新領土ニ於ケル外交上ノ事務ハ最モ愼戒注意ヲ加フベキモノアルベク隨テ本部ヲ特設スルノ必要アリ。

四、殖產部

臺灣ハ荒蕪未開ノ地其半ニ居ルヲ以テ將來大ニ之ヲ開發スルノ道ヲ講ゼザルベカラザルニ付特ニ本部ヲ設ケテ其調査勸誘ヲ努メシムルヲ要ス。

五、軍事部

陸海軍ヲ合一シテ本部ヲ置キ軍隊、要塞、憲兵竝ニ艦隊ノ巡航ニ關スル事務ヲ掌ラシム。

六、交通部

現ニ鐵道ノ設アリ又郵便ノ事務アリ將來益々運輸交通ノ事業ヲ擴張スルノ要アリ。

七、司法部

本部ハ須臾モナカルベカラズ而シテ刑ハ本部ノ刑法ヲ適用スベシト雖モ治罪法ニ至テハ之ヲ適用スルヲ得ズ宜ク簡易ナル治罪手續ヲ規定スベシ。

外國領事館ノ事

在臺灣外國領事官ニシテ貴官ガ總督ノ任ニ當ラル、時マデ引續キ其職務ヲ執レルモノハ更ニ我政府ノ認許ヲ經ズシテ其職ヲ繼續セシメラルベシ。貴官就任ノ後任命セラレ又ハ其職ヲ執ルノ領事官ハ貴官ノ認可ヲ經タル後更ニ我政府ノ認可狀ヲ得ベキモノトス。

領事裁判ノ事

領事裁判權ニ關シテハ或ル指定ノ制限內ニ於テ之ヲ執行スルコトハ我政府亦峻拒セズト雖モ爲ニ軍隊運動ノ障碍トナリ若シクハ貴官ノ職務ニ支障アリト思料セラル、ニ於テハ認許スルヲ要セズ。然レドモ勢ヒ事繁雜ニ涉ルヲ以テ尤モ熟圖セザルベカラズ。

在臺灣淸民ノ事

臺灣在住ノ淸國臣民ハ平和條約ニ據リ二年間其屬籍ヲ變更セズシテ依然居住スルヲ許サル、モ其滿期ノ後引續キ居住センコトヲ欲スル者ニ對シテハ將來種々ノ問題ヲ生ズベシ而シテ此問題ニ關スル制限ヲ成ルベク嚴ニシ、以テ政治上ノ善良ナル發達ヲ企圖セザルベカラズ。依テ貴官ハ此レ等人民ノ戶籍及所有不動產ノ調査ヲ急ニスルヲ要ス。

臺灣澎湖島ハ地廣ク民衆シ仍テ按スルニ總督府ノ下更ニ地方官ヲ置クノ要アルモ知ルベカラズ貴官ハ先ツ右ノ要項ニ基キテ庶政ヲ施キ且ツ詳細調査報告セラルベシ、政府ハ其報告ニ準據シ之ガ爲ニ要スル人員ヲ派出シ將來永遠島地ニ恰當スルノ制度ヲ定メントス。

右及訓令候也

明治二十八年五月十日

內閣總理大臣伯爵　伊藤博文

臺灣總督海軍大將子爵　樺山資紀殿

內閣總理大臣ヨリ臺灣總督ヘノ訓令

調査及議事竝ニ局務整理ニ關スル規則

今般本局ヲ置カレ候ニ付其ノ官制第八條ニ依リ別冊ノ通調査及議事竝ニ局務整理規則制定候間爲御含寫眞壹通及御回附候將又軍事ニ關スルモノニ限リ大本營存在候間ハ大本營及陸海軍兩省ト直接御往復可相成ハ勿論ノ儀ト存候此又併テ申添候也。

明治二十八年六月二十日

臺灣總督宛　臺灣事務局總裁

第一條　事務ノ敏捷ヲ謀ル爲委員ヲ左ノ部ニ分チ其ノ主務ヲ定ム。

一、治民部委員
他ノ部ニ屬セザル一切ノ行政ニ關スル件ヲ掌ル。

二、財務部委員
租稅海關稅及會計事務ニ關スル件ヲ掌ル。

三、外務部委員
外國ニ關涉スル件ヲ掌ル。

四、殖產部委員
殖產ニ關スル件ヲ掌ル。

五、軍事部委員
海陸軍行政ニ關スル件ヲ掌ル。

六、交通部委員
運輸交通ニ關スル件ヲ掌ル。

七、司法部委員
司法ニ關スル件ヲ掌ル。

第二條　庶務ノ整理ヲ完備セシムル爲第一條各部ノ外總務部ヲ置キ總裁又ハ副總裁之ヲ統轄シ委員一人之ヲ佐ケ書記官ヲシテ之ニ屬セシム。

第三條　委員ノ部屬ハ總裁之ヲ定ム。

第四條　委員ハ一人ニシテ數部ヲ兼ネシメ竝ニ一部ニ數人ヲ屬セシムルコトヲ得。

第五條　臺灣事務局ノ事務ハ總裁之ヲ主務各部ノ委員ニ附シテ審査セシメ其ノ報告書及決議案ヲ提出セシム但報告及決議案ハ緊急ノ場合ニ於テ口頭ヲ以テ之ヲ陳述スルコトヲ得。

事ノ數部ニ渉ルモノアルトキハ總裁ハ部ニ拘ハラズ特ニ委員ノ一名又ハ數名ヲ指定シテ主務委員トナスコトヲ得。總裁ハ書記官ニ命ジテ報告書及決議ヲ起案セシムルコトアルベシ。

總裁ハ審査ノ期日ヲ限定スルコトヲ得。

第六條　事ノ各部ニ渉ルモノ又ハ單ニ一部ノ主務ニ屬スルモ重要ナルモノハ主務委員ノ審査ヲ經タル後總會ニ於テ審議決定ス其ノ他ノ事項ハ總裁之ヲ決定ス。

第七條　事急速ヲ要シ總會ヲ招集スノ暇ナキトキ又ハ總裁ニ於テ必要ヲ認メザルトキハ總裁ハ之ヲ總會ノ議事ニ附セザルコトヲ得。

第八條　臺灣事務局官制第四條ノ文書ハ前三條ノ手續ニ依リ之ヲ處分ス。

第九條　總會ヲ開クベキトキハ緊急ノ場合ヲ除ク外豫メ期日ヲ定メ會議ノ事項ヲ各委員ニ通報ス。

第十條　總會ノ議案ハ書面ヲ以テ豫メ之ヲ各委員ニ配附シ又ハ總會ノ席ニ於テ總裁ヨリ口頭ヲ以テ之ヲ報告ス。

第十一條　主務委員ハ總會ニ於テ委員トシテ列席スルノ外報告ノ事務ニ任ズ。

第十二條　臺灣事務局官制第四條第二項ノ文書ヲ審査シ其ノ局議主務ノ官衙ト意見ヲ異ニシタル場合ニ於テハ總裁ハ局議ヲ其ノ官衙ニ通牒シ再考ヲ求メ尚妥協ヲ得ザルトキハ之ヲ閣議ニ提出スベシ。

第十三條　臺灣事務局官制第四條ノ往復文書トアルハ行政事務ニ關スル各官衙ヨリ指令照覆等ニ支障抵觸ノ虞ナカラシムルヲ主要トスルノ目的ニ出ルヲ以テ事務上既定ノ事項ニシテ其進行上ノ關係ニ付往復スルハ此ノ限リニアラズ同條第二項モ亦同シ。

第十四條　臺灣事務局ニ到達スル文書ハ總務部ニ於テ之ヲ接受披封シ接受ノ番號ヲ記入シ件名簿ニ接受番號ト共ニ其ノ要領ヲ登記シ直ニ總裁ノ閲覽ニ供ス。

接受ノ文書ニシテ其ノ性質重大ナラザルトキハ總務部ハ總裁ノ閲覽ヲ經ス直チニ之ヲ主務委員ニ回附シ主務委員審査ノ後其ノ決議ト共ニ主務委員ヨリ之ヲ總裁ノ閲覽ニ供スルコトヲ得。

第十五條　臺灣事務局ヨリ發送スベキ文書ハ總務部ニ於テ其ノ發送番號ヲ附シ件名簿ニ發送番號ト共ニ其ノ要領ヲ登記シ而ル後發送スルモノトス。

第十六條　臺灣事務局ノ文書ニシテ其ノ處分ヲ終了シタルモノハ總務部ヨリ之ヲ內閣記錄課ニ交附シテ保存セシム其ノ未ダ處分ヲ終了セザルモノハ總務部ニ於テ之ヲ保管ス。

內閣總理大臣ノ訓令

臺灣總督府目下ノ情勢ハ一面ニ於テハ戰鬪ニ從事シ、一面ニ於テ臺北各地治民ノ庶務ニ從事シ、百事至難ノ境遇ニ在ルコト推察ニ餘アリ。然ルニ事ノ難易ヲ問ハズ到底我目的ヲ達スル爲メニハ內外相應ジ利便ヲ圖リ速ニ鎭定ノ奏功ヲ望マザルベカラズ。故ニ臺灣事務局ニ於テハ成ルベク敏速ニ總督府ノ要求ニ應ジ、鎭定迄ノ間ハ法規等ニ拘泥セズ、萬事敏捷ニ相運候筈ニ申合セ委員一同致協議居候處今事ノ整理ヲ圖リ將來ノ秩序ヲ立ルハ頗ル必要ノ事ト存候故、左ノ箇條ヲ以テ及內訓候間總督府各部ヘ被服膺候樣御示命有之度候。

一、新規ノ事業ハ成ルベク他日ニ讓リ目下ノ處ニテハ鎭定ノ功ヲ奏スル爲差置キ難キモノニ止ムルコト。

二、總督府ヨリノ要求ハ各部各課ヨリ各省ニ直接ニ稟申スルトキハ區々ニ涉リ事端ヲ錯雜ナラシムルニ付、統一ヲ旨トシ總テ總督ヨリ臺灣事務局ニ稟申スルコト、但臺灣事務局局務整理規則第十三條ニヨリ事務上既定ノ事項ニシテ其運行上ノ關係ニ屬スルモノハ此ノ限ニアラズ。

三、經費ノ要求ハ其目的主旨ヲ明瞭ニシ豫算ノ形式ヲ具ヘテ提出スルコト。

四、內地ニ於テ吏員ヲ採用シ及巡査其他ノ人員ヲ募集スルハ總督府ニ於テ直接ニ之ヲ爲スコトヲ止メ之ヲ臺灣事務局ニ稟申シ臺灣事務局ヨリ其筋ニ移牒シテ總督府ノ需ニ應ズルコト。

五、諸職工人夫等雇入ノ請求ハ其使用ノ目的及之ヲ使用スル期限ノ豫定ヲ記入スルコト。

六、總督府限リニ規定シタル事項ニシテ經費ノ決算上會計檢査院ヘ通牒ヲ要スルモノハ漏ナク臺灣事務局ヘ報告シ他日ノ衝突ヲ避クベキコト。

七、民治上ノ事務ニ使用スル人員ハ平定ニ至ルマデ成ルベク現在ノ人員ヲ增加セズ以テ他日ノ煩累ヲ貽サヽル樣注意スルコト。

八、各國領事軍艦船舶居留地及歐米人民其他總テ外國ニ關スルコトハ早便ヲ以テ臺灣事務局ニ報告スルコト。

以上

明治二十八年七月十六日

內閣總理大臣伯爵　伊藤博文

臺灣總督子爵　樺山資紀殿

追テ前各項ノ事柄ハ凡テ軍事ト相關セサルハ勿論ノ儀ニ有之此段爲念申添候也。

內閣總理大臣ノ訓令

臺灣直任文武官取扱ノ件

別紙臺灣事務局總裁具申臺灣島ニ文武ノ職ヲ奉ズル者、事平定ニ至ルマデ外征從軍者トシテ取扱ノ件ヲ審査スルニ、日清間ノ平和既ニ回復シ、臺灣島ノ交換完了シタル今日ニ於テハ、臺灣島ハ固ヨリ既ニ帝國ノ版圖ニ屬スト雖、條約批准交換後二年間ハ其ノ土民ハ未ダ純然タル帝國ノ臣民ト云フコトヲ得ザルノミナラズ。數多ノ清國ノ殘兵險要ノ地ニ據リ、土民ト相合シテ頑固ナル抗敵ヲ爲シ形勢恰モ一敵國ノ如ク、今後尚幾多ノ戰鬪アルコトヲ免レザルベシ。而シテ是皆日清戰爭ニ伴フノ結果ナルヲ以テ、事實上之ヲ外征ト見做シ、其ノ從軍者ヲ外征從軍者トシテ取扱フモ敢テ不都合ノ廉無之ニ付具申ノ通閣議決定相成可然ト認ム。

臺閣一號

別紙臺灣總督稟申臺灣島ニ文武ノ職ヲ奉スル者、事平定ニ至ルマデ外征從軍者トシテ取扱ノ件ハ稟申ノ通リニテ然ルベシト局議決定候條此段及具申候也。

明治二十八年七月十日

臺灣事務局總裁伯爵　伊藤博文

內閣總理大臣伯爵　伊藤博文殿

官第三四條（別紙）

日清兩國間ノ平和既ニ回復シ臺灣島ノ受授ハ完了セリト雖モ本島ノ形勢ハ恰モ一敵國ノ如ク、清國ノ將卒ハ淡水三貂灣ニ於テ我兵ヲ射擊シ、又金晈蔣基隆等ニ於テ頑固ナル抗敵ヲ爲セリ。而シテ南方安平打狗等ニ於テ我軍艦ヲ屢砲擊シ、又新竹以南ハ尚夥多ノ殘留清兵充滿スルヲ以テ、今後幾多ノ戰鬪アルヲ免レズ。故ニ名義上ヨリ言ヘバ臺灣ハ既ニ帝國ノ新領土タリト雖モ、實際ノ狀況ハ外征ニ於ケルニ異ルコトナシ。故ニ本島ニ於テ文武ノ職ヲ奉ズルモノハ其平定ニ至ルマデ總テ外征從軍者トシテ諸般ノ取扱相成度此段稟申候也。

明治廿八年六月十九日

臺灣總督子爵　樺山資紀

內閣總理大臣伯爵　伊藤博文殿

別紙臺灣事務局總裁具申ノ件ヲ案スルニ臺灣ニ文武ノ職ヲ奉ズル者モ、他日賞典勳章記章等附與ニ關スル儀有之節ハ武官ニ準ジ詮議ニ相成タシト云フニアリ案スルニ賞典勳章授與ニ付テハ文武各

其勳勞ニ對シ詮議可相成ニ付、文官ヲ以テ特ニ武官ニ準ズルノ必要ナカルベク、臺灣總督稟議ノ要旨ハ必竟文官モ亦從軍者トシテ其勳績ヲ認メラレタシト云フニ外ナラズト思考ス。而テ臺灣派遣文武官ヲ以テ今回ノ事局終了ニ至ル迄外征從軍者ト認ムルノ件ハ既ニ閣議決定相成タルニ付テハ本件モ亦右閣議ノ範圍内ニ在ルモノトシ具申ノ通決定相成然ルベシ。

臺閣二號

臺灣ニ文官ノ職ヲ奉ズル者他日賞典勳章竝ニ從軍記章等附與ニ關スル議有之節武官ニ準ジ詮議セラレタキ旨別紙臺灣總督稟議ノ通ニテ可然ト局議決定候條此段及具申候也

明治二十八年七月十日

臺灣事務局總裁伯爵　伊藤博文

内閣總理大臣伯爵　伊藤博文殿

官秘第一號（別紙）

曩キニ赴任ノ際ハ平和ニ臺灣ノ受授ヲ了シ、平和ニ臺灣全島ノ政治ヲ視ルコトヲ得ルノ見込ニ有之候處、内地出發以來匪徒各所ニ蜂起シ、全島戰亂ノ悲境ニ在ルヲ以テ、文官ハ軍隊ノ進行ニ屬シ一城市ヲ占領スレバ輙チ其ノ地ニ開廳撫民ニ從事シ其ノ辛酸軍隊ニ異ナルナシ。就テハ他日賞典勳章竝ニ從軍徽章等付與ニ關スル議有之候節ハ文官モ亦武官ニ準シ御詮議相成候樣致度此段豫テ及稟議候也。

明治二十八年六月廿六日

臺灣總督子爵　樺山資紀

内閣總理大臣伯爵　伊藤博文殿

臺灣總督府假條例

臺灣總督府假條例左之通之ヲ定ム。

明治廿八年五月廿一日

臺灣總督子爵　樺山資紀

第一條　總督府ニ左ノ職員ヲ置ク。

民政局長官
陸軍局長官
海軍局長官
內務部長
外務部長
殖產部長
財部部長
學務部長
遞信部長
司法部長
參事官
秘書官
書記官
技師
屬
技手

第二條　民政局長官ハ總督ヲ佐ケ行政司法ノ事務ヲ整理シ各部ノ事務ヲ監督ス。

第三條　陸軍局長官及海軍局長官ハ總督ヲ佐ケ軍政及軍務ヲ整理シ其下ニ幕僚ヲ置ク。

第四條　各部長ノ命ヲ承ケ其主務ヲ掌理シ部中ノ事務ヲ指揮監督ス。

第五條　參事官ハ總督又ハ長官ノ命ヲ承ケ審議立案ヲ掌ル。

第六條　秘書官ハ總督ノ命ヲ承ケ機密事務ヲ掌リ又ハ臨時命ヲ承ケ各部ノ事務ヲ助ク。

第七條　書記官ハ總督又ハ長官ノ命ヲ承ケ官房ノ事務ヲ掌リ又ハ各部ノ事務ヲ助ク。

第八條　技師ハ各部又ハ各課ニ分屬シ上官ノ命ヲ承ケ技術ニ從事ス。

第九條　屬ハ上官ノ命ヲ承ケ庶務ニ從事ス。

第十條　技手ハ上官ノ命ヲ承ケ技術ニ從事ス。

第十一條　總督府ニ左ノ三局ヲ置ク。

民政局
陸軍局
海軍局

第十二條　總督官房ニ衞生事務總長ヲ置キ衞生ニ關スル事務ヲ掌理セシム。

第十三條　總督官房ニ秘書、記錄、用度ノ三課ヲ置キ秘書課ハ職員往復等ニ關スル事務ヲ掌リ、記錄課ハ記錄ニ關スル事務ヲ掌リ、用度課ハ物品ノ出納ニ關スル事務ヲ掌ル。

第十四條　民政局ノ事務ヲ分テ左ノ七部トス。

內務部
外務部
殖產部
財務部
學務部
遞信部
司法部

第十五條　內務部ハ地方行政、警察、監獄、土木、地理及戶籍ニ關スル事務其他ニ屬セザル事務ヲ掌ル其分課ヲ定ムル左ノ如シ。

庶務課　地方行政、地理、戶籍其他各課ニ屬セザル事項。
警保課　警察、監獄ニ關スル事項
土木課　土木、建築ニ關スル事項

第十六條　外務部ハ通商貿易及外國人ニ關スル事務ヲ掌ル。

第十七條　殖產部ハ農、工、商、水產、林野、鑛山ニ關スル事務ヲ掌ル其分課ヲ定ムル左ノ如シ。

農務課　農業、林野、水產ニ關スル事項
商工課　商工、鑛山ニ關スル事項

第十八條　財務部ハ租稅及豫算決算ニ關スル事務ヲ掌ル其分課ヲ定ムル左ノ如シ。

主稅課　關稅ヲ除ク外租稅及豫算、決算ニ關スル事
關稅課

第十九條　學務部ハ教育ニ關スル事務ヲ掌ル

第二十條　遞信部ハ鐵道、郵便、電信、船舶、燈臺等ニ關スル事務ヲ掌ル其分課ヲ定ム左ノ如シ。

鐵道課

通信課　郵便、電信、船舶、燈臺等ニ關スル事

第廿一條　司法部ハ民刑事件ニ關スル事務ヲ掌ル

第廿二條　各課ニ課長ヲ置キ所管部長ノ指揮ヲ承ケ課務ヲ掌理セシム。

第廿三條　總督府ノ下ニ數縣ヲ置キ每縣ニ知事書記官參事官警部長及支廳長ヲ置ク。

地方官假官制

第一條　臺灣ニ左ノ三縣ヲ置ク。

其位置及管轄區域ハ別ニ之ヲ定ム。

臺北縣

臺灣縣

臺南縣

第二條　澎湖列島ニ島廳ヲ置ク。

第三條　縣內須要ノ地ニ支廳ヲ置ク。

支廳ノ位置及其管轄區域ハ別ニ之ヲ定ム。

第四條　各縣ニ左ノ職員ヲ置ク。

知事

書記官

警部長

參事官
技師
屬
警部
技手

第五條　知事ハ一人勅任トス。

第六條　書記官、警部長、參事官ハ各一人奏任トス。

第七條　技師ハ奏任トス

第八條　屬、警部技手ハ判任トス。

第九條　知事ハ總督ノ指揮監督ヲ承ケ法律命令ヲ執行シ部内ノ行政及司法事務ヲ管理ス。

但重罪事件ニ關シテハ總督ノ認可ヲ經テ之ヲ執行ス。

第十條　知事ハ部内ノ行政及司法事務ニ付其職權若クハ特別ノ委任ニ依リ管内一般又ハ其一部ニ縣令ヲ發スルコトヲ得。

第十一條　知事ハ支廳長ノ處分若クハ命令ノ成規ニ違ヒ公益ヲ害シ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ其處分若クハ命令ヲ取消シ又ハ停止スルコトヲ得。

第十二條　知事ハ所部ノ官吏ヲ監督シ奏任官ノ功過ハ總督ニ具狀シ判任官以下ノ進退ハ之ヲ專行ス。

第十三條　知事ハ所部ノ奏任官ノ懲戒ヲ總督ニ具狀シ判任官以下ハ之ヲ專行ス。

第十四條　知事ハ廳中處務ノ細則ヲ設クルコトヲ得。

第十五條　知事事故アルトキハ書記官其職務ヲ代理ス。

前項ノ場合ニ於テ書記官事故アルトキハ總督ニ於テ縣高等官ノ一人ヲシテ知事ノ職務ヲ代理セシム。

第十六條　知事ハ縣ノ官吏ヲシテ其事務ノ一部ヲ臨時代理セシムルコトヲ得。

第十七條　知事ハ其職權ニ屬スル事務ノ一部ヲ支廳長ニ代理セシムルコトヲ得。

第十八條　各縣ニ知事官房ヲ置キ左ノ事務ヲ掌ラシム。

一、官吏ノ進退及身分ニ關スル事項
一、文書ノ接受發送ニ關スル事項
一、官印、縣印ノ管守ニ關スル事項
一、記錄編輯、統計報告及簿書保存ニ關スル事項
一、外國人ニ關スル事項

第十九條　各縣ニ左ノ二部ヲ置ク

內務部

警察部

第二十條　內務部ニ於テハ町村收稅土木地理殖產學務會計民事ニ關スル司法裁判ノ事務其他ノ庶務ヲ掌ル。

第二十一條　警察部ニ於テハ高等警察、行政警察監獄衞生及刑事ニ關スル司法裁判ノ事務ヲ掌ル。

第二十二條　書記官ハ內務部長警察部長ハ警察長トナリ知事ノ命ヲ承ケ部下ノ官吏ヲ指揮監督シ所部ノ事務ヲ掌理ス。

第二十三條　書記官、事故アルトキハ知事ニ於テ廳中高等官ノ一人ヲシテ其事務ヲ代理セシメ警部長參事官事故アルトキハ知事ニ於テ所部ノ上席官吏ヲシテ其事務ヲ代理セシム。

第二十四條　參事官ハ知事ノ命ヲ承ケ審査立案ヲ掌ル

參事官ハ知事ノ命ヲ承ケ內務部ノ課長トナリ又ハ臨時部課ノ事務ヲ助クルコトアルヘシ。

第二十五條　知事ハ各部ニ分課ヲ定メ總督ニ報告スヘシ。

第二十六條　內務部ノ各課長ハ屬ヲ以テ之ニ充ツ。

但技師又ハ技手ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得。

第二十七條　警察部ニ課長ヲ置クトキハ警部ヲ以テ之ニ充ツ。

第二十八條　屬ハ內務部各課及知事官房ニ分屬シ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス。

第二十九條　警部ハ警察部警察署警察分署又ハ監獄署監獄支署ニ屬シ上官ノ指揮ヲ受ケ事務ヲ分掌シ部下ノ巡查ヲ指揮監督ス。

第三十條　管內須要ノ地ニ警察署又ハ警察分署ヲ配置ス但其位置及管轄區域ハ總督ノ認可ヲ經テ知事之ヲ定ム。

第三十一條　各縣ニ一監獄署ヲ置ク但總督ノ認可ヲ經テ須要ノ地ニ監獄支署ヲ置クコトヲ得。

第三十二條　警察署長警察分署長監獄署長及監獄支署長ハ警部ヲ以テ之ニ充ツ警察署長警察分署長監獄署長及監獄支署長ハ上官ノ指揮ヲ承ケ其署主管ノ事務ヲ掌理シ部下ノ官吏ヲ監督ス。

第三十三條　巡查ニ關スル規程ハ別ニ之ヲ定ム。

第三十四條　各縣ニ縣醫ヲ置ク。

縣醫ノ待遇ハ奏任若クハ判任トス。

縣醫ハ上官ノ命ヲ承ケ醫療及衞生事務ニ從事ス。

第三十五條　各支廳ニ左ノ職員ヲ置ク。

支廳長

屬

第三十六條　支廳長ハ奏任トス知事ノ指揮監督ヲ承ケ法律命令ヲ部內ニ執行シ部內ノ行政及司法事務ヲ掌理シ部下ノ官吏ヲ監督ス但重罪事件ニ關シテハ知事ノ指揮ヲ承クベシ。

第三十七條　支廳長ハ法律命令ニ依リ若クハ知事ヨリ委任セラレタル事件ニ付支廳令ヲ發スルコトヲ得。

第三十八條　支廳長事故アルトキハ上席ノ判任官其職務ヲ代理ス。

第三十九條　支廳長ハ支廳ノ官吏ヲシテ其事務ノ一部ヲ臨時代理セシムルコトヲ得。

第四十條　支廳屬ハ判任トス。

第四十一條　支廳屬ハ支廳長ノ命ヲ承ケ庶務ニ從事ス。

第四十二條　支廳長ハ支廳管轄內ニ於ケル警察事務ニ就キ警察署長及警察分署長ヲ指揮監督ス。

第四十三條　澎湖島廳ニ左ノ職員ヲ置ク。

島司

屬

警部

第四十四條　島司ハ奏任トス。

島司ハ總督ノ指揮監督ヲ承ケ法律命令ヲ部內ニ執行シ部內ノ行政及司法事務ヲ掌理シ部下ノ官吏ヲ監督ス但重罪事件ニ關シテハ總督ノ指揮ヲ承クベシ。

第四十五條　島司ハ法律命令ニ依リ又ハ特ニ委任セラレタル事件ニハ島廳令ヲ發スルコトヲ得。

第四十六條　島司ハ島廳屬及警部ノ任免ヲ總督ニ具申スルコトヲ得。

第四十七條　島司事故アルトキハ上席判任官其職務ヲ代理ス。

第四十八條　島司ハ島廳ノ官吏ヲシテ其事務ノ一部ヲ臨時代理セシムルコトヲ得。

第四十八條　島司屬及警部ハ判任トス。

第五十條　島廳屬ハ上官ノ命ヲ承ケ庶務ニ從事ス。

第五十一條　島廳所轄地內ニ警察署監獄署各一署ヲ置ク。

第五十二條　島廳警部ハ警察署又ハ警察分署ニ分屬シ上官ノ命ヲ承ケ警察事務ニ從事シ部下ノ巡査ヲ指揮監督ス。

第五十三條　島廳ニ島廳醫ヲ置ク。

島廳醫ノ待遇ハ奏任若クハ判任トス島廳醫ハ上官ノ命ヲ受ケ島廳ノ醫療及衞生事務ニ從事ス。

發布セシ告諭

大日本臺灣總督府民政局長官水野

勁功曉諭事此次

大日本
大清　兩國欽差全權大臣議定講和條約內臺灣各島自今全權大日本國項者總督澁任先遣員辨前往淡水口何計在該處兵丁等放槍要擊無由進行故迂路過此將趣臺北府凡臺灣各地民衆從來各自管有之田地家產等秋毫不犯永遠仍舊唯條約所載城壘兵器等既久歸官之物件立卽交接受授則可也再民衆各安其堵並不許蠢動滋事違者從嚴辨切々　特示

大日本明治二十八年五月念九日

欽命臺灣總督海軍大將子爵樺山　爲

勁功曉諭事照得本總督本月初二日在基隆會同

大清國欽差交接臺灣全島及澎湖列島全權委員二品頂戴前出仕大臣李經芳交接臺灣全島及澎湖列島並各該地方所有屬公物件均皆清楚於是臺灣全島及澎湖列島全歸。

大日本帝國之版圖然詎前署臺灣巡撫唐景崧背戾。

大清國

大皇帝與

大日本國

大皇帝平和締盟之叡旨使嗾在臺之清兵膽敢弄兵抗我是以本總督不得止一擊之下電掃在基隆匪類除暴安良閭閻無恙現唐景崧遁逃而沒跡舊部將卒或殪或走敗殘兵勇今也全失其所得歸出沒四方刼奪良民殊甚抑敗兵之抗我軍擾閭里罪罪當萬死想其所爲或用上司之命或爲飢渴所驅其情有稍可憐者茲本總督欽奉。

大日本國

大皇帝陛下

聖旨特加恩寬宥敗兵之死罪且准把再等兵勇搭我船送到清國福州再等宣懷遵本總督諭旨從本日起六月三十日爲止稟請駐劄臺北基隆滬尾等處我文武官衙門可歸去清國一路船資固不要分文宜須及早爲歸計倘若有頑冥不悟潛汰所在爲害閭閻者一經查出卽加誅戮決不姑寬若或有各地居民藏匿敗兵不告訴官府者家主與敗兵同罪案律重辨爲此出示曉諭敗兵居民人等一體知悉莫違特示切々。

明治二十八年六月　日

臺灣總督海軍大將子爵樺山　爲

發布セシ告諭

新政寛仁蠲免租稅事照得臺灣各島既經全歸
大日本帝國所屬士民悅服永頌昇平詎料不法之徒嘯集匪類煽動愚民膽敢負嵎以抗我軍惟是烏合草賊
不難殲滅爾等順良民衆恐悸驚慌未能安堵就業矣我。
大皇帝至仁德軫念爾等民庶殊深特沛
恩詔命臣資紀除在海關應徵諸稅暨官租之外蠲免本年全臺澎湖各地民間錢糧及諸稅厘誠是
皇恩似海
帝德如天合行出示曉諭再士民等一體知悉恭奉
叡旨勵精盡瘁以圖報效本總督有厚望焉切切特示

右　諭　通　知

明治二十八年七月日給

大日本臺灣總督海軍大將子爵樺山　爲
凱功曉諭事本總督蒞任本地專在統治順良士民各安其堵故當基隆上陸使民政局長官水野出示曉諭
以臺灣各地民間田業廬舍秋毫不犯各歸業主仍舊照管事又頃者奉
大日本帝國
大皇帝叡旨除關稅照收一件外蠲免本年臺澎全地錢糧雜稅及百貨釐金以紓民困詎料匪類揑造謠言煽
動愚民毀壞鐵道電線道路橋梁至甚暗擊我輸糧兵辨及馬隊干大站陷河邊於是本總督不得已一擊電
掃匪類或殪或逃巢窟灰燼是皆所俾民衆目睹耳聞也抑亂民之抗天兵雖罪當萬死想其所爲或被匪徒
逼脅煽誘其情稍可憐者玆本總督特加恩寛宥於天兵未到時迅降轅門致誠歸順者從前罪愆一切寛赦
不究而至如謠言總是妄誕無根俾民衆勿再受其煽惑倘若有頑冥不悟謠擾鄉者一經查出立加誅戮決
不姑寛以彰嚴正切切特示

明治二十八年七月二十五日

臺灣總督海軍大將樺山　爲
凱切出示曉諭事照得鹽乃百味之祖人間不可一日缺乏向來臺地鹽務統歸官辨壟斷其利而民困已甚
矣我
大皇帝體念民艱痛恨宿弊特命本總督一切弊竇盡行革廢鹽乃日食之需豈有官辨私販之理自示之後無
論鹽販食戶概行自買自賣以便民生再諸色人等當知
聖皇體恤愛民之至意其各凛遵切特示

明治二十八年七月二十一日

欽命臺灣總督海軍大將子爵樺山　爲
凱切曉諭事照得此次發布臺灣人民軍事犯處分令則着施行全臺諸色人等一體凛遵莫致干犯法紀自

取罪累爲此特諭

臺灣人民軍事犯處分令

第一條　臺灣人民犯于左之條目者罪當死刑。

一、抗敵大日本帝國之陸海各軍及有判抗之行爲者

二、毀壞鐵道水陸電線路橋梁軍械子藥森林壘柵水道火車船舶船廠以及衙署軍用之土地房屋物件等有

三、帶道寇賊爲其奸細或隱匿之竝幇助抗敵大日本國者之行爲或使俘虜逃走或刼奪之者

四、將大日本帝國軍隊軍艦軍用船舶之所在動靜及軍用物件之所在數量密報于敵人者

五、爲大日本帝國軍隊軍艦軍用船舶之嚮導有詐欺之行爲者

六、揑造謠言或喧嘩吵鬧擾大日本國軍隊軍艦軍用船舶之靜穩者

七、投毒藥于井泉河流或汚穢之使不堪其用者

八、將鴉片煙竝其吸烟用什器交付大日本國軍人軍屬及從軍者或給與吃烟所者

第二條　前條所揭之罪不問其敎唆者及從犯未遂或均原諒狀酌量減刑。

第三條　前條所載之處分於軍法會議所或臺灣總督府民政局斷之。

第四條　本令發布之日着卽施行。

明治二十八年七月　日

營業許可手續

第一條　臺灣島在留ノ內地人中臺灣總督府ニ於テ渡航ヲ許可シ又ハ臺灣總督府ノ職務ニ從事シタリシ者ニシテ其職ヲ辭シ臺灣ニ於テ引續キ正實ノ業務ヲ營マントスル者ハ左ノ事項ヲ具シタル營業願書正副二通ヲ作リ縣知事又ハ支廳長ヲ經テ願出ツベシ。

一、商業ノ種類

二、資本ノ高

三、開店ノ場所

四、營業上ニ使役スル傭人ノ員數

五、從來ノ職業

第二條　縣知事又ハ支廳長ニ於テ前條ノ願書ヲ審査シ確實ト認ムルトキハ臺灣總督府民政局ニ申牒スベシ。

第三條　臺灣總督府民政局ニ於テ縣知事又ハ支廳長ノ申牒ヲ正當ト認メ且ツ行政上又ハ軍事上ニ妨害ナシト認メタルトキニ限リ營業ヲ許可シ之ヲ許可シタルトキハ縣知事又ハ支廳長ヲ經テ營業許

可證ヲ與フ可シ。

營業者ハ憲兵警察官ヨリ要求アルトキハ何時タリトモ營業許可證ヲ示スノ義務アルモノトス。

第四條　營業者ニシテ占賣其他公衆ノ利益ヲ害スルノ所爲アルトキハ其營業ヲ禁止スルコトアルベシ。

第五條　營業者ニハ商品ノ輸送其他何等ノ事情アルニ拘ハラズ官船ニ貨物塔載又ハ營業者ノ便乘ヲ許可セザルモノトス。

但シ臺灣總督府ヨリ緊急ノ必需品調達ヲ命ジタル場合ニ於テハ特ニ之ヲ許可スルコトアルベシ。

第六條　營業者ハ如何ナル事情アルニ拘ハラズ糧食其他必需品ノ支給又ハ拂下ヲ臺灣總督府ヘ願ヒ出ルヲ得ズ。

營業者ノ願出ニ依リ縣知事又ハ支廳長ニ於テ官有家屋ヲ貸與スルコトアルベシ此場合ニ於テハ相當ノ身元保證金ヲ徵スルコトアルベシ。

第七條　此手續ハ政府ニ於テ自由渡航ヲ許可シ及營業ニ關スル規則ヲ制定スルマデ其效力ヲ有スルモノトス。

保良局章程及開局式臨場報告

寫

具僉稟臺北淡水衆紳商陳滄浪等爲遵諭妥議公舉正副主理繕定章程訂期開設保良局以安良善而靖地方事竊自奉諭以來當於本日會集諸同人當堂僉舉列廷玉爲局中正理葉爲圭爲局中副主理李春生爲合辦並訂於明治二十八年八月五日暫祖大稻程建昌街泉興茶館開局試辦所有公議章程十二條粘呈於後所願從此官紳和洽虛衷襄辦俾良善有賴地方奠安兵有凱旋之日民樂熙皞之歲是紳等所仰望於政府列憲念重生靈恩施格外之至意也謹將所擧並理並開局情形稟請

仁憲大人電照存案以昭愼重切叩

明治二十八年八月　日　僉稟臺北淡水衆紳商

黃　謙　光㊞　陳　洛㊞　李　樹　華㊞　張　夢　星㊞
陳　滄　浪㊞　魏　炳　文㊞　王　慶　壽㊞　陳　登　亢㊞
李　種　玉㊞　林　望　周㊞

謹將保良局章程開列於後

一、保良局原爲保良而設局中諸紳董當能善體此意急公好義其應辦事宜專以伸寃勞誣救良極善爲念凡民間禮物酬謝一概擯棄以杜情弊

一、此次辦理保良事出仁義斯後凡我在局紳董咸知仁者恕也所有嫌舊怨概行解釋誓不敢以公報私

一、該局僅請試辦兩個月係各紳董踴躍奉公不敢希望脩金至局中經費願就各紳富擁損若限滿後　政府欲再接連續辦一切脩金經費當由　政府勞行妥議籌撥

一、諸紳董或遠處十數里之外或家中有事或倏沾徵疾致不能常川到局者該値日公事准由當日所集諸董事各數妥議辦理

一、除禮拜日外每日訂自十點鐘到局至十二點鐘散議

一、各街市鄉村准由總局紳董僉舉該地公正之人設立分局以便上惠得以下施下情得以上達。

一、凡民間詞訟在局紳董不得干預倘事關身家性命之大寃抑者准由分局公正之人投訴總局而總局紳董查實代爲禀求政府俯准細察斯免是非顚倒草菅人命

一、凡各色兵丁有在街衢鄉村因言語不通情恣不達或誤虛良民或擅入閨門或淫汙婦女或攘取財物者准由該地分局投訴總局查實禀求政府伸詳究辦

一、各街衢鄉村遇有匪徒搶奪銀物或聚黨煽亂准由分局投訴總局代爲禀明派兵拏獲或該地良民拏獲再請派兵押送

一、各保各屬應設分局試辦兩個月爲費無無議應由各庄紳富之好義者捐資襄辦或由房租式各庄□斟抽津貼要無不可

一、莫論總局分局所有試辦兩個月經費若干雖議由各紳富捐給然亦祇准核實數目足供敷演爲度

一、在局紳董請各給門牌護照禁止兵丁軍屬非因公事勿得亂入其家斯奉公事者無私家之患

祝保良局創設詞

本縣直轄各保之紳商等互相商議禀請允准創設保良局於大稻程建冐街之泉興茶館乃以本日擧行開局之典田中知事昨赴新竹尙未回衙本官代親臨焉抑保良局者保良良民之處也局中諸君不得其人則已苟得其人則彼此相和公平廉直總理民事忠正誠實分別良莠可使人民各得其所也否則明黨相爭始勤終惰各存其心各倚其能保良之局化作以公報私之場矣可不謹且愼哉本日來會之諸君雖始相識之人居多能知其公正自持廉直待人成仁取義以副我政府念重生民之至意也劉葉二紳主理局務李紳爲會辦蓋亦應各紳商之擧也三紳常能體保良之意均照章程辦理事務則庶幾乎立見成功本官有厚望焉因此交結諮問兩伸聊錄所見以充祝詞

明治廿八年八月八日

臺北縣知事田中綱常代理
臺北縣書記官　仁禮敬之

乙號

臺北縣諮問第壹號

上意下達之方法如何

革新草創之際官民情意不相通曉殊習俗不相同言語亦不相通應有何法上意得而下達

同　第貳號

從來所設火輪車路及大小道路之地或有素屬百姓管有者當時清國政府收用之有何規條

右諮問保良局

明治二十八年八月八日

臺北縣知事　田中綱常

丙號

居上克明爲下克忠古聖賢爲政之要寔在此矣遵自奉命涖任於本土以來以爲就地方紳矜咨詢民情以擧上下協睦之實而內外事繁未能達其望竊以爲憾焉今也我臺北淡水衆紳相謀該保良局安良善而靖地方事實官民和洽之樞機而下情上達之關鍵也再今以後隨時會同克成厥功以俱浴聖世之澤而樂熙皞之歲本日臨於玆賀設局之擧竝嘉李君周旋之勞也

明治廿八年八月八日

欽差辨理公使總督府民政局長官
正五位勳四等　水野遵

丁號

頃承

鈞諭恭悉吾

大日本帝國

大皇帝洪仁溥施澤被臺灣紳民不但局中主理暨各位董事聞之感激不勝而將來紳等必將今日之情轉佈各市鎮鄉村使各處父老稚幼咸聞德音同聲謳頌今日者斯島既隸吾

大日本帝國統轄而亦將爲吾

大日本帝國百姓自今伊始所願吾

政府諸大憲視吾民甚於痌瘝在抱待吾衆勝似梟之翼雛庶生靈有賴國祚奠安徽特局中諸紳私心點禱是亦全臺黎庶所仰望而終身者也

副主理　葉爲圭
保良總局正主理　劉廷玉等令頌
會辨　李春生

秘書類纂 臺灣資料 終

同	保良局正主理	劉廷玉
同	保良局副主理	葉爲圭
同	會辦	李春生
同	會員	林望周
同	同	潘成清
同	同	魏炳文
同	同	潘光松
同	同	王慶壽
同	同	陳夢星
同	同	張受益
同	同	陳樹華
同	同	陳景南
同	同	李登元
同	同	陳種玉
同	同	李謙光
同	同	黃

秘書類纂 臺灣資料

人名索引

《イ》

伊藤博文　六、七、八、九、一一、一三、一四、二〇、二三、二三、二四、二五、二六、二七、二八、三一、八一、八六、八七、一〇一、一〇二、二五四、二七五、四三九、四四五、四四六、四四七、四四八、四四九

石黑忠悳　六二

イリヨット　四三一

《ロ》

盧德全　三二八

盧宗文　三二八

盧九　三二八、三三二

盧時金　三二八

盧蘊　三三一

ロルドカンニング　四二〇

《ハ》

林董　二〇、二一、一四九、一五〇

原敬　三一

橋口文藏　六九、二九二、二九七

ハレック　三二八

潘乾仁　三三二

白金火　三七八

范意成　三七八

白來成　三七八

潘成清　四七四

潘光松　四七四

《ニ》

仁禮敬之　四七二

《ホ》

ホブキンス　一七二

ホール　二二八

《ト》

唐景菘　二、一三、三一、四六二
トーマスヒットヒユー　一九七
トッド　四一〇

《チ》

張兆連　二、一三
張之洞　三一〇
陳爲港　三二八
陳添　三二九
張騰雲　三二九
陳連登　三三一
陳良泉　三三一
張宙　三三一
張沙　三三一
張隆溪　三三二
張洸縣　三三三
張鴻銘　三三三
陳景盛　三三八
陳水　三二八
陳進　三二八
陳世傳　三二八
張佛堂　三二八
陳榮宗　三二八
陳乞　三二八
張火炎　三二八
趙維石　三二八
陳燦枝　三二八
張添木　三二八
陳金番　三二八
張金爐　三二八
陳成　三二八
チエルキゴー　四〇五
チャルス、ウード　四一三、四一四
陳洛　四六九
陳滄浪　四六九
張夢星　四六九、四七四
陳登亢　四六九、四七四
陳景南　四七四
陳受益　四七四

《リ》

李鴻章　六、七、八、一〇、二〇、二三、二三、
李經方　七、九、一〇、一四、一五、一六、一八、二〇、
三〇、四六二
三〇、三一
劉承　三六、四四、五五、三四
劉銘傳　二九二
林本源　三〇五、三〇六、四七四
劉廷王　三〇五、三〇六、四七四
李春生　三三八
李端　三三八
林九治　三三八
李秋波　三三八
李天來　三三八
李川洚　三三八
林聽　三三八
林貓加　三三八
林安員　三三八
李應辰　三三八
李文圭　三三一
李萬　三三一
李泰　三三三
林才　三三三
李國章　三三三
李東州　三三三
劉牛　三三三
林安貞　三二八
林清火　三二八
林費　三二八
劉祖思　三二八
林俊　三二八
李德　三二八
林光明　三二八
劉才　三二八
林翼　三二八
林土　三二八
劉添進　三二八
劉錦繡　三二八
李金釵　三二八
李和尚　三二八
林金城　三二八
林登舟　三二八
林登波　三二八

林得發 三七八
林永新 三七八
林來進 三七八
林其美 三七八
林勃螺 三七八
李樹華 四六九、四七四
李種玉 四六九、四七四
林望周 四六九、四七四

《オ、ヲ》

王文韶 二〇、二一、二三
大山巖 二三七
萩原貞固 三〇七
王審 三三八
王炳如 三三八
翁江 三三八
王萬 三三八
汪式金 三三三
王朝 三三七
王良明 三七八
王順元 三七八

歐王佛 三七八
汪天生 三七八
王金火 三七八
王添極 三七八
王慶壽 四六九、四七四

《ワ》

渡邊 二九二

《カ》

樺山資紀 六、七、八、九、一一、一三、一四、一六、一八、二〇、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、二五四、二七五、二八四、二八五、二九八、三三五、三五二、三六四、四三九、四四五、四四七、四四九、四五〇、四六二、四六三、四六四、四六五
顏思齊 一三七
カンジー 二九九
川村 三三八
郭那 三三八
郭堀 三三八
郭九泉 三三一
桂太郎 三七一

郭源清 三七八
郭金火 三七八
郭坤厚 三七八
郭昆賜 三七八
郭金鐘 三七八
カントルブリー 四二七

《ヨ》

葉爲圭 二〇五、二〇六、四七四
楊矮 三三一
楊珍 三三一
葉金英 三三一
葉福順 三七八
楊福生 三七八
楊清河 三七八
楊桃仁 三七八
楊飛龍 三七八
楊君田 三七八
葉成樹 三七八
楊元慶 三七八
葉爾仁 三七八
葉滄海 三七八
楊金柱 三七八
芳川顯正 四〇九

《タ》

田中綱常 一七二、二九七、二九八、四七二

《レ》

連金豹 三七八
連燈號 三七八

《ソ》

曾石岳 三三三
蘇大吉 三三三
莊尾獅 三三三
莊天能 三七八
曾順 三七八
莊世賢 三七八
曾進丁 三七八

《ナ》

楢原陳成 五〇

《ラ》
雷俊庄 三三八
雷俊臣 三七八
駱頂盛 三七八
雷思九 三七八
雷烏車 三七八
駱金火 三七八
雷溪源 三七八

《ム》
陸奥宗光 一八

《ウ》
維廉（ウイリアム）第三世 八九
薄井佳久 三七九、三八〇

《ク》
グナイトス 九一
グレンビル 九四

《マ》
マンスフヒールド 八九
マツサツチユセツト 九四
馬生 三三九
マカイ 三七七
マキアウエル 四〇一

《ケ》
嚴仁德 三七八
嚴金星 三七八

《フ》
フエルグソン 三三七

《コ》
孔子 四三
兒玉利國 三〇三
吳輔卿 三三八
江梅友 三三八
高珠 三三八
黃亦岩 三三八
吳水 三三八
江凹 三三八
黃輯五 三三一
江甲技 三三三
洪成技 三三三
江阿土 三三三
黃雄 三三三
黃際唐 三三三
吳泰壽 三七六、三七七
ゴールド 三七七
高文有 三七八
洪抱 三七八
洪諒 三七八
黃炎 三七八
江金土 三七八
黃春來 三七八
候在昆 三七八
黃世德 三七八
高烏頭 三七八
吳河塗 三七八
洪心洞 三七八
黃謙光 四六九、四七四

《テ》
鄭芝龍 三六
鄭成功 三六
鄭克塽 三六
デニソン 二二六
鄭紹基 三三三
鄭捷化 三三三
鄭塗生 三七八

《ア》
アンソン 九〇
彰仁親王 三六四

《サ》
サー、ロバルト、ウオルポール 九四
蔡宗興 三三三
西鄉菊次郎 三七八
蔡老泉 三七八
蔡洛書 三七八

《キ》
紀占鰲 三三八
許烏獅 三三三

許山助　三七八
魏炳文　四六九、四七四

《ユ》

游阿乾　三七八

《ミ》

水野遵　一一、一五、二三、二〇二、二〇三、二〇四、二〇六、二〇七、四六二、四六四、四七三
ミシエル、ルボン　三九九、四〇九

《シ》

島村久　一六、一八、三
ジョージ第三世　九四、九五、四一〇
ジュールジュバル　一四三
周慶西　三三八
周師濂　三三八
周叙　三三八
謝連壽　三三一
謝旺　三三三
謝力　三七八
施潤　三七八
弛靜仁　三七八
周文炳　三七八
徐占頭　三七八

《ヒ》

維多利亞（ビクトリア）　一一五、一一六、一三九

《モ》

モンテギュー、カークード　七八、八一、一〇七、一四八

《セ》

ゼームス第二世　九四
セシル、ミール、ド、ウイヒル　四〇六

《ス》

スウインホー　一六

昭和十一年二月十六日印刷
昭和十一年二月二十一日發行

（非賣品）

臺灣資料
不許複製

校訂者　平塚篤
發行者　平塚篤
東京市杉並區西荻窪二丁目六十六番地
印刷者　河合勝夫
東京市本所區厩橋一丁目廿七番地
凸版印刷株式會社本所分工場

發行所
東京市麴町區内幸町大阪ビル内
秘書類纂刊行會
電話銀座(57)五一一八番
振替東京三一六六四番

701
23